県道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

中又北遺跡

2020．3

香川県教育委員会

序　文

本書には、県道多度津丸亀線建設事業に伴い発掘調査を実施した、香川県仲多度郡多度津町道福寺に所在する中又北遺跡（なかまたきたいせき）の報告を収録しています。

中又北遺跡では、縄文時代晩期から中・近世に至る遺構・遺物が出土し、遺跡周辺における土地利用の変遷について、貴重な資料を得ることができました。特に縄文時代晩期中葉では、自然河川より土器・石器、木製品を始め、多量の堅果類が出土しました。土器の出土状況から、比較的短期間に遺物の投棄がなされ、埋没したことがわかりました。当該期の資料は本県ではまとまった出土例が乏しく、土器の様相を理解する上で良好な資料を得ることができました。また、出土した堅果類はそれぞれ数万点ものクリ果実とコナラ属果実が含まれ、共伴する加工木や自然木の樹種同定や花粉分析の結果から、自然河川の周辺にクリ林が広がっていたことが推定され、人為的な植生管理がなされていた可能性も指摘されました。西日本において、縄文時代晩期にクリの積極的な利用がなされていたことが明らかとなった点は、非常に重要な意義のあるものと考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、中讃土木事務所及び関係諸機関、地元関係者各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和２年３月

香川県埋蔵文化財センター
所長　西岡　達哉

例　言

1　本報告書は、県道多度津丸亀線建設事業に伴い発掘調査を実施した、香川県仲多度郡多度津町道福寺に所在する中又北遺跡（なかまたきたいせき）の報告を収録している。

2　発掘調査は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査時及び整理作業時の調査担当機関における組織構成は、次のとおりである。

（第１次調査：平成 27 年度）

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括　課長 増田宏　副課長 小柳和代

文化財グループ　課長補佐 片桐孝浩　主任文化財専門員 山下平重　文化財専門員 乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括　所長 真鍋昌宏　次長 前田和也

調査課　課長 森格也　主任文化財専門員 佐藤竜馬　技師 竹内裕貴

（第２次調査：平成 28 年度）

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括　課長 小柳和代　副課長 片桐孝浩

文化財グループ　課長補佐 (兼) 片桐孝浩　主任文化財専門員 山下平重・乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括　所長 真鍋昌宏　次長 森格也

調査課　課長 古野徳久　主任文化財専門員 信里芳紀

（整理作業：平成 30 年度）

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括　課長 小柳和代　副課長 片桐孝浩

文化財グループ　課長補佐 (兼) 片桐孝浩　主任文化財専門員 信里芳紀　文化財専門員 真鍋貴匡

香川県埋蔵文化財センター

総括　所長 西岡達哉　次長 時松弘志

資料普及課　課長 古野徳久　（整理担当）主任文化財専門員 蔵本晋司

4　調査及び整理作業において次の方々、関係機関の協力を得た。

梶原慎司、香川将慶、高上　拓、明治大学黒曜石研究センター、高松市埋蔵文化財センター、香川県中讃土木事務所、多度津町教育委員会、地元自治会、地元水利組合　（順不同、　敬称略）

5　報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司が担当した。

6　本報告書で用いる座標系は世界測地系(国土座標第Ⅳ系)で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7　遺構は次の略号により表示した。

SB　掘立柱建物　　SP　柱穴・小穴　　SK　土坑　　SD　溝　　SG　溜池

SR　自然河川・低地帯　　SX　性格不明遺構　　SZ　水田面

8　遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。

9　遺構断面図中の注記の色調は、一部を除いて小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。

10　土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』及び長崎盛輝『新版　日本の伝統色　その色名と色調』，青幻舎を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11　石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面をＡ面、右側の面をＢ面として記述する。剥片石器の場合はＡ面が背面、Ｂ面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。

12　遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

縄文土器：千羨幸 2011「晩期中葉～晩期後葉」『重要文化財　橿原遺跡出土品の研究』、奈良県立橿原考古学研究所

宮地聡一郎 2016「流末溝田遺跡の縄文晩期土器　－九州地方周防灘沿岸部における刻目突帯文土器出現期の様相－」『九州歴史資料館研究論集』41、九州歴史資料館

弥生土器：信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　旧練兵場遺跡Ⅱ』，香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院

蔵本晋司 2019「香東川下流域産土器群の基礎的研究」『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　上林遺跡』、香川県教育委員会

須恵器：　田辺昭三 1981『須恵器大成』，角川書店

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし　－大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40 －』

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念　考古学論叢』，関西大学文学部考古学研究室

中・近世：大橋康二 2000「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』、九州陶磁学会

佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 18 冊　国分寺楠井遺跡』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査セン

ター
佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』, 香川県教育委員会･㈶香川県埋蔵文化財調査センター
太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』
白神典之 1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第 19 号、東洋陶磁学会
乗岡実 2000「中世の備前焼甕（壺）の編年案・紀年銘資料にみる大甕（壺）の変遷」『第２回中近世備前焼研究会資料』, 中近世備前焼研究会
乗岡実 2000「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』, 中近世備前焼研究会
乗岡実 2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』, 岡山市教育委員会
藤澤良祐 1987「本業焼の変遷（１）」『研究紀要Ⅵ』、瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1993『瀬戸市史　陶磁史篇』、瀬戸市
松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』、香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査と整理の経過 …… 2

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法 …… 16
第２節　基本層序 …… 16
第３節　遺構・遺物 …… 22

第４章　自然科学的分析の成果

第１節　自然科学分析 …… 93
第２節　プラント・オパール分析 …… 114
第３節　放射性炭素年代測定１ …… 120
第４節　放射性炭素年代測定２ …… 129
第５節　大型植物遺体分析 …… 135
第６節　土器付着炭化鱗茎の同定 …… 144
第７節　土器付着物の残存脂質分析 …… 148
第８節　炭素・窒素安定同位体比分析 …… 156
第９節　レプリカ法による土器圧痕の同定 …… 160
第 10 節　土器付着赤色顔料の蛍光Ｘ線分析 …… 163
第 11 節　縄文時代晩期中葉の浅鉢内面付着物の材質分析 …… 165
第 12 節　弥生土器の胎土分析 …… 167
第 13 節　木製品・加工木の樹種同定 …… 187
第 14 節　中又北遺跡から出土した縄文時代晩期の木材の樹種 …… 190
第 15 節　香川県中又北遺跡の縄文時代晩期の花粉化石群 …… 202

第５章　まとめ

第１節　時期別遺構の変遷 …… 207
第２節　縄文土器の分類と編年的位置 …… 210
第３節　中又北遺跡 SD01 出土の土器 …… 219

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡位置と周辺の地質環境 …… 5
第３図　遺跡周辺地形分類図 …… 7
第４図　周辺遺跡分布図 …… 9
第５図　調査区割図 …… 16
第６図　1a 区北壁土層断面図 …… 17
第７図　1b 区西・南壁土層断面図 …… 18
第８図　2a 区東・南壁土層断面図 …… 19
第９図　2b 区北・南壁土層断面図 …… 20
第 10 図　2c 区中央畔土層断面図 …… 21
第 11 図　縄文時代晩期遺構配置図 …… 23
第 12 図　SR01 最下層平・断面図 …… 24
第 13 図　SR01 最下層出土遺物実測図 …… 25
第 14 図　SR01 下層平・断面図 …… 26
第 15 図　SR01 下層出土遺物実測図１ …… 27
第 16 図　SR01 下層出土遺物実測図２ …… 28
第 17 図　SR01 下層出土遺物実測図３ …… 29
第 18 図　SR01 下層出土遺物実測図４ …… 31
第 19 図　SR01 下層出土遺物実測図５ …… 32
第 20 図　SR01 下層出土遺物実測図６ …… 33
第 21 図　SR01 下層出土遺物実測図７ …… 35
第 22 図　SR01 下層出土遺物実測図８ …… 36
第 23 図　SR01 下層出土遺物実測図９ …… 37
第 24 図　SR01 下層出土遺物実測図 10 …… 38
第 25 図　SR01 下層出土遺物実測図 11 …… 39
第 26 図　SR01 下層出土遺物実測図 12 …… 40
第 27 図　SR01 下層出土遺物実測図 13 …… 41
第 28 図　SR01 下層出土遺物実測図 14 …… 42
第 29 図　SR01 下層出土遺物実測図 15 …… 43
第 30 図　SR01 下層出土遺物実測図 16 …… 44
第 31 図　SR01 下層出土遺物実測図 17 …… 45
第 32 図　SR01 下層出土遺物実測図 18 …… 46
第 33 図　SR01 下層出土遺物実測図 19 …… 47
第 34 図　SR01 上・中層平・断面・出土遺物実測図１ …… 48
第 35 図　SR01 上層出土遺物実測図２ …… 49
第 36 図　SR01 上層出土遺物実測図３ …… 50
第 37 図　弥生時代前期遺構配置図 …… 51
第 38 図　SZ01 平・断面・出土遺物実測図 …… 52
第 39 図　SZ02 平・断面・出土遺物実測図 …… 53
第 40 図　SZ03 出土遺物実測図 …… 54
第 41 図　弥生時代後期～古墳時代前期遺構配置図 …… 55
第 42 図　SB03 平・断面図 …… 56
第 43 図　SK01・SK02 平・断面・出土遺物実測図 …… 57
第 44 図　SD01 平面図 …… 58
第 45 図　SD01 断面図 …… 59
第 46 図　SD01 下層出土遺物実測図１ …… 61
第 47 図　SD01 下層出土遺物実測図２ …… 62
第 48 図　SD01 下層出土遺物実測図３ …… 63
第 49 図　SD01 上層出土遺物実測図 …… 64
第 50 図　SD01 最上層出土遺物実測図１ …… 65
第 51 図　SD01 最上層出土遺物実測図２ …… 66
第 52 図　SD01 最上層出土遺物実測図３ …… 67
第 53 図　SD01 層位不明遺物実測図 …… 68
第 54 図　SD02 平・断面・出土遺物実測図１ …… 69
第 55 図　SD02 出土遺物実測図２ …… 70
第 56 図　SD03・SD04 平・断面・出土遺物実測図 …… 71
第 57 図　SX02 平・断面図 …… 72
第 58 図　中世遺構配置図 …… 73
第 59 図　SB01 平・断面・出土遺物実測図 …… 75 ～ 76
第 60 図　SB02 平・断面図 …… 77
第 61 図　柱穴出土遺物実測図 …… 78
第 62 図　SK04・SK06 平・断面・出土遺物実測図 …… 79
第 63 図　SK07 平・断面・出土遺物実測図 …… 80
第 64 図　SD07・SD10・SD11 平・断面・出土遺物実測図 81
第 65 図　SX03・SD12 平・断面・出土遺物実測図 …… 82
第 66 図　SX04・SD06 平・断面・出土遺物実測図 …… 83
第 67 図　近世遺構配置図 …… 84
第 68 図　SK05 平・断面・出土遺物実測図 …… 85
第 69 図　SD05 平・断面・出土遺物実測図 …… 86
第 70 図　SD08・SD09 平・断面・出土遺物実測図 …… 87
第 71 図　SX01 平・断面図 …… 88
第 72 図　SG01 平・断面図 …… 89
第 73 図　SG01 出土遺物実測図 …… 90
第 74 図　SK03・SK08 平・断面図 …… 91
第 75 図　遺構外出土遺物実測図 …… 92
第 76 図　調査地点の層序および分析試料採取層準 …… 94
第 77 図　SR01 充填堆積物写真 …… 95
第 78 図　主要珪藻化石群集の層位分布 …… 100
第 79 図　花粉化石群集の層位分布 …… 104
第 80 図　丸亀低地・高松低地の考古遺跡における
主要木本花粉の層位分布 …… 109
第 81 図　SR01 における試料採取層準 …… 115
第 82 図　植物珪酸体分布図 …… 118
第 83 図　暦年較正結果 …… 122
第 84 図　マルチプロット図 …… 123
第 85 図　縄文時代晩期中葉～後葉の暦年代値 …… 127
第 86 図　マルチプロット図１ …… 131
第 87 図　マルチプロット図２ …… 132
第 88 図　単体測定試料の暦年較正結果 …… 133
第 89 図　ウィグルマッチングを行なった試料 …… 134
第 90 図　現生日本産生物と土器付着炭化物抽出脂肪酸の
炭素同位体組成 …… 152
第 91 図　現生日本産生物、遺跡出土遺物と土器付着炭化
物の炭素、窒素同位体組成と C/N 比 …… 153
第 92 図　炭素・窒素安定同位体比 …… 158
第 93 図　炭素安定同位体比と C/N 比の関係 …… 158
第 94 図　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果 …… 164
第 95 図　ポイント・カウント法による
岩石・鉱物粒子の－粒度分布図（その１）…… 176
第 96 図　ポイント・カウント法による
岩石・鉱物粒子の－粒度分布図（その２）…… 177
第 97 図　ポイント・カウント法による
粒度組成図（その１）…… 178
第 98 図　ポイント・カウント法による
粒度組成図（その２）…… 179
第 99 図　遺跡周辺の地質図 …… 180
第 100 図　各ブロック試料の花粉分析試料採取層準 …… 202
第 101 図　中又北遺跡 SR01 の主要花粉分布図 …… 205
第 102 図　遺構変遷図１ …… 208
第 103 図　遺構変遷図２ …… 209
第 104 図　中又北遺跡出土縄文晩期土器分類案 …… 211
第 105 図　縄文土器深鉢の編年案 …… 215
第 106 図　縄文土器浅鉢の編年案 …… 217
第 107 図　原中村遺跡出土香東川下流域産土器

の模倣土器…… 220
第 108 図　遺跡分布図…… 221

表目次

表 1　調査区別調査担当者一覧…… 2
表 2　珪藻分析結果（1）…… 98
表 2　珪藻分析結果（2）…… 99
表 3　花粉分析結果…… 103
表 4　分析試料一覧…… 114
表 5　植物珪酸体（プラント・オパール）…… 116
表 6　測定試料および処理…… 120
表 7　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果…… 121
表 8　縄文時代晩期中葉～後葉の年代値集成…… 126
表 9　単体測定試料および処理…… 130
表 10　ウィグルマッチング測定試料および処理…… 130
表 11　単体試料の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果…… 131
表 12　試料№５の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果…… 131
表 13　SR01 下層から出土した大型植物遺体…… 137
表 14　SR01 上層から出土した大型植物遺体…… 138
表 15　クリ果実の大きさ…… 140
表 16　ダイズ属炭化種子の大きさ…… 141
表 17　ササゲ属アズキ亜属炭化種子の大きさ…… 141
表 18　中又北遺跡出土の炭化鱗茎付着土器…… 144
表 19　試料と現生炭化鱗茎の表皮細胞および葉肉細胞の平均値と標準偏差…… 145
表 20　試料と現生炭化鱗茎の細胞サイズ計測表…… 146
表 21　脂質組成…… 150
表 22　パルミサン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成…… 151
表 23　脂質抽出前後（脱脂前後）の土器内面付着炭化物の炭素窒素安定同位体組成と C/N 比…… 152
表 24　結果一覧表…… 157
表 25　中又北遺跡出土土器の圧痕同定結果…… 160
表 26　分析結果…… 164
表 27　分析試料とその詳細…… 165
表 28　生漆の赤外吸収位置とその強度…… 165
表 29　胎土分析試料の詳細…… 167
表 30-1　ポイント法による粒子の同定・計測結果…… 170
表 30-2　ポイント法による粒子の同定・計測結果…… 171
表 30-3　ポイント法による粒子の同定・計測結果…… 172
表 30-4　ポイント法による粒子の同定・計測結果…… 173
表 31　各試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載…… 174
表 32　胎土中の粘土および砂粒の特徴…… 174
表 33　木製品・加工木の樹種同定結果…… 187
表 34　器種別の樹種同定結果…… 188
表 35　現地取り上げ試料の木材の樹種同定結果集計表…… 194
表 36　堆積物試料中の木材の樹種同定結果集計表…… 195
表 37　2c 区 SR01 の分析試料の堆積物の特性…… 203
表 38　SR01 から検出された花粉化石の一覧表…… 204
表 39　土器観察表（1）…… 225
表 40　土器観察表（2）…… 226
表 41　土器観察表（3）…… 227
表 42　土器観察表（4）…… 228
表 43　土器観察表（5）…… 229
表 44　土器観察表（6）…… 230
表 45　土器観察表（7）…… 231
表 46　平・丸瓦観察表…… 231
表 47　軒丸瓦観察表…… 231
表 48　軒平瓦観察表…… 231
表 49　石器・石製品観察表…… 232
表 50　木製品観察表…… 232
表 51　金属器観察表…… 233

付表 1　現地取り上げ試料の樹種同定結果…… 196

写真目次

図版 1　珪藻化石…… 112
図版 2　花粉化石…… 113
図版 3　植物珪酸体…… 119
図版 4　中又北遺跡の埋没旧河道 SR01 から出土した大型植物遺体（1）…… 142
図版 5　中又北遺跡の埋没旧河道 SR01 から出土した大型植物遺体（2）…… 143
図版 6　中又北遺跡出土の土器付着炭化鱗茎の走査型電子顕微鏡写真…… 147
図版 7　分析対象試料と試料採取位置…… 155
図版 8　試料採採位置…… 159
図版 9　中又北遺跡出土土器の写真と圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真…… 162
図版 10　試料採取位置および赤色顔料の生物顕微鏡写真…… 164
図版 11　赤色顔料が付着する浅鉢と付着物の赤外吸収スペクトル図…… 166
図版 12　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真（1）…… 181
図版 13　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真（2）…… 182
図版 14　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真（3）…… 183
図版 15　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真（4）…… 184
図版 16　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真（5）…… 185
図版 17　胎土の偏光顕微鏡写真…… 186
図版 18　木製品の光学顕微鏡写真…… 189
図版 19　中又北遺跡出土木材の顕微鏡写真（1）…… 197
図版 20　中又北遺跡出土木材の顕微鏡写真（2）…… 198
図版 21　中又北遺跡出土木材の顕微鏡写真（3）…… 199
図版 22　中又北遺跡出土木材の顕微鏡写真（4）…… 200
図版 23　中又北遺跡出土木材の顕微鏡写真（5）…… 201
図版 24　中又北遺跡 SR01 より検出された花粉化石…… 206
図版 25　遺構写真 1…… 236
調査前風景（東より）
1a 区遺構検出状況（東より）
1a 区全景（西より）

図版 26　遺構写真２ ･････････････････････････････ 237
1a 区全景（東より）
1b 区遺構検出状況（西より）
1b 区全景（西より）
図版 27　遺構写真３ ･････････････････････････････ 238
1a 区 SB03 全景（北より）
1a 区 SB03 柱穴断面
SP50（北より）
SP49（北より）
SP48（北より）
SP47（北より）
SP53（東より）
SP52（南より）
SP51（南より）
図版 28　遺構写真４ ･････････････････････････････ 239
1a 区 SD01 全景（北より）
1a 区 SD01 遺物出土状況（東より）
1a 区 SD01 遺物出土状況（東より）
1a 区 SD01 土層断面（南より）
1a 区 SD01 土層断面（南より）
図版 29　遺構写真５ ･････････････････････････････ 240
1a 区 SD02 全景（北より）
1a 区 SD02 全景（東より）
1a 区 SD02 全景（北より）
1a 区 SD02 遺物出土状況（南より）
1b 区 SD02 遺物出土状況（北より）
1a 区 SD02 土層断面（南より）
1a 区 SD02 土層断面（東より）
図版 30　遺構写真６ ･････････････････････････････ 241
1b 区 SD01 全景（北より）
1b 区 SD03 全景（北より）
1a 区 SK01（北より）
1a 区 SK01 土層断面（南より）
1a 区 SK02 土層断面（北より）
1b 区 SK04 検出状況（北より）
1a 区北壁基本層序（南より）
1b 区南壁基本層序（北より）
図版 31　遺構写真７ ･････････････････････････････ 242
1a 区 SB01 全景（南より）
1a 区 SB01 全景（東より）
1a 区 SP37 遺物出土状況（北より）
図版 32　遺構写真８ ･････････････････････････････ 243
1a 区 SB01 柱穴断面
SP45（西より）
SP44（西より）
SP42（西より）
SP30（西より）
SP16（東より）
SP31（西より）
SP09（東より）
SP38（南より）
SP41（西より）
SP19（北より）
SP11（南より）
SP10（東より）
SP29（北より）
SP34（北より）
SP13（北より）
SP08（北より）
SP25（南より）
SP17（南より）
SP32（南より）
SP12（西より）
SP22（西より）
SP37（西より）
SP36（西より）
SP15（西より）
SP07（西より）
SP26（西より）
SP33（西より）
図版 33　遺構写真９ ･････････････････････････････ 244
1a 区下層遺構全景（東より）
1a 区 SK03 検出状況（西より）
1a 区 SK03 土層断面（西より）
1a 区 SP14 土層断面（北より）
1a 区調査区北壁土層断面（南より）
図版 34　遺構写真 10･････････････････････････････ 245
2a 区 SD05 全景（西より）
2a 区 SD05 土層断面（西より）
2a 区西壁基本層序（東より）
2b 区 SG01 全景（東より）
2b 区 SG01 堤体断面（西より）
2b 区 SG01・SD13 全景（東より）
2d 区全景（南東より）
2d 区全景（西より）
図版 35　遺構写真 11･････････････････････････････ 246
2c 区中央畔土層断面（北西より）
2c 区中央畔西半土層断面（北東より）
2c 区中央畔土層断面細部（北より）
図版 36　遺構写真 12･････････････････････････････ 247
2c 区中央畔土層断面細部（北より）
2c 区中央畔西半土層断面（北東より）
2c 区北壁土層断面（南東より）
図版 37　遺構写真 13･････････････････････････････ 248
2c 区 SR01 上層掘り下げ（南より）
2c 区 SR01 全景（南より）
2c 区 SR01 全景（東より）
図版 38　遺構写真 14･････････････････････････････ 249
2c 区 SR01 下層遺物出土状況
2c 区 SR01 下層遺物（51）出土状況
2c 区 SR01 下層遺物（74）出土状況
2c 区 SR01 下層遺物（69）出土状況
2c 区 SR01 下層木製容器（139）出土状況
2c 区 SR01 下層遺物（133）出土状況
2c 区 SR01 最下層遺物（自然木）出土状況
2c 区 SR01 最下層遺物（加工木）出土状況
図版 39　遺構写真 15･････････････････････････････ 250
2c 区 SZ02 耕作土検出状況（南より）
2c 区 SZ02 疑似畦畔検出状況（南より）
2c 区 SZ02 全景（南より）
図版 40　遺構写真 16･････････････････････････････ 251
2c 区 SZ01 全景（西より）
2c 区 SZ02 擬似畦畔断面１（東より）
2c 区 SZ02 擬似畦畔断面２（南より）
2c 区 SZ02 擬似畦畔断面３（西より）
2c 区 SZ02 擬似畦畔断面５（西より）
図版 41　遺構写真 17･････････････････････････････ 252
2c 区 SZ01 耕作土検出状況（南より）
2c 区 SZ01 中央擬似畦畔検出状況（南より）
2c 区 SZ01 南半擬似畦畔検出状況（南より）

図版 42　遺構写真 18 …… 253
2c 区 SZ01 全景（南より）
2c 区 SZ01 擬似畦畔断面 1 （西より）
2c 区 SZ01 擬似畦畔断面 2 （東より）
2c 区 SZ01 擬似畦畔断面 3 （南東より）
2c 区 SZ01 擬似畦畔断面 4 （南より）
図版 43　遺構写真 19 …… 254
2c 区第 1 面全景（南より）
2c 区第 1 面遺構検出状況（南より）
2c 区 SK06 土層断面（南より）
2c 区 SK07 土層断面（西より）
2c 区 SD10・SK07 土層断面（東より）
図版 44　遺構写真 20 …… 255
2c 区 SK07 全景（東より）
2c 区 SD08・09・SX04 検出状況（東より）
2c 区 SX04 全景（北より）
2c 区 SX04 土層断面（北より）
2c 区 SP71 土層断面（西より）
2c 区 SD06 土層断面（南より）
2c 区 SD10 土層断面（南より）
2c 区 SD11 土層断面（東より）
図版 45　遺構写真 21 …… 256
2c 区 SX03 全景（東より）
2c 区 SX03 集石（東より）
2c 区 SX03 集石断面（南より）
2c 区 SX03 土層断面（南より）
2c 区 SX03・SD12 土層断面（北西より）
図版 46　遺物写真 1 （土器） …… 257
4・5・6・7・8・9・10・11・15・18・20・21
図版 47　遺物写真 2 （土器） …… 258
12・14・17・19・22・25・27・29・32・40
図版 48　遺物写真 3 （土器） …… 259
41・47・49・51・52・54・55・56・78
図版 49　遺物写真 4 （土器） …… 260
58・62・67・68・69・71・72・75・77・79・
80・82
図版 50　遺物写真 5 （土器） …… 261
61・83・85・86・87・88・91・92・93・94
図版 51　遺物写真 6 （土器） …… 262
5・6・8・9・10・11・14・20・40・452・473
図版 52　遺物写真 7 （土器） …… 263
447・448・449・453・456・457・458・459・
460・461・462・463・464・465・466・467・
468・469・470・471
図版 53　遺物写真 8 （土器） …… 264
171・172・198・206・214・226・291・329
図版 54　遺物写真 9 （土器） …… 265
159・211・212・213・215・216・305・359・
396・397・412・413・430
図版 55　遺物写真 10（石器） …… 266
99・100・101・140・141・142・232・233・
314・315・316・317・340・355・356・378・
431
図版 56　遺物写真 11（石器） …… 267
102・103・104・143・144・145・147・234・
235・318・319・
図版 57　遺物写真 12（石器） …… 268
128・129・132・146・148
図版 58　遺物写真 13（石器） …… 269
150・357・442
図版 59　遺物写真 14（石器） …… 270
130・131・320
図版 60　遺物写真 15（石器） …… 271
105・106・107・108・109・116・120・122・
123
図版 61　遺物写真 16（石器） …… 272
110・113・114・115・117・118・149
図版 62　遺物写真 17（石器） …… 273
111・112・119・121
図版 63　遺物写真 18（石器・石製品） …… 274
124・125・126・127・236・432・433・434・
435・436・437・438・439・440・441
図版 64　遺物写真 19（石製品・金属器） …… 275
133・391・408・443・444
図版 65　遺物写真 20（木器・木製品） …… 276
2・3・134・135・136・137・138・151・428
図版 66　遺物写真 21（木製容器・139） …… 277

付図目次

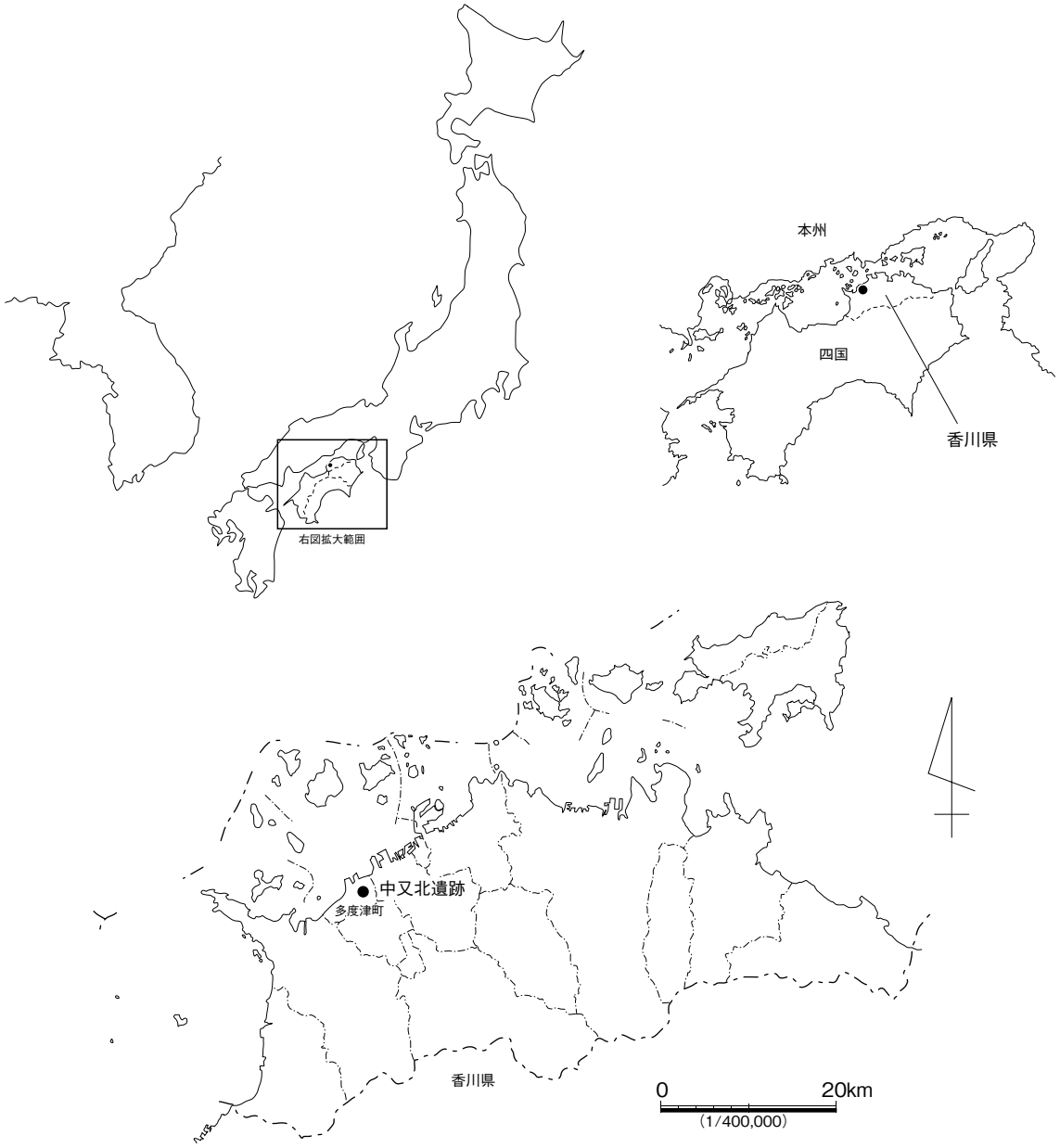
付図　中又北遺跡平面図

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯

香川県土木部道路課（以下、道路課と略す）では、丸亀市の市街地南部と仲多度郡多度津町を結ぶ延長約 7.5㎞の新規路線として、県道多度津丸亀線の整備を平成元年度に計画した。本事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて香川県教育委員会では､路線予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するため、周辺の遺跡分布や対象地の地形環境等を総合的に判断し､必要箇所について試掘調査を実施することで、事業主体である中讃土木事務所と合意した。なお、本路線は東から、丸亀、多度津、奥白方の３工区に区分され、本遺跡周辺は多度津工区に位置する。

平成元年 12 月には、路線予定地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である丸亀市金蔵町の「道下



第１図　遺跡位置図

遺跡」の確認調査を実施した。調査の結果、弥生時代後期を中心とする遺構・遺物が確認されたため、翌平成２年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時）による発掘調査が実施された。さらに、平成 10 年度以降には、奥白方工区や多度津工区においても、路線内の試掘調査を順次実施し、埋蔵文化財の適切な保護に努めてきた。

表１　調査区別調査担当者一覧

調査区	１次 平成 27 年度 2016.2 ～ 2016.3	２次 平成 28 年度 2016.4 ～ 2016.6	実掘面積 （㎡）
１ａ区	佐藤・竹内		559.685
１ｂ区	佐藤・竹内		33.855
２ａ区		信里	163.852
２ｂ区		信里	65.811
２ｃ区		信里	284.383
２ｄ区		信里	29.827

「中又北遺跡」は、周知の埋蔵文化財包蔵地である中又遺跡や庄八尺遺跡に近接することから、用地買収の終了した平成 19・20・24 年度に試掘調査を実施し、そのうち平成 19・20 年度に実施した調査により土坑等の遺構が検出され、新たに確認された遺跡である。試掘調査は、事前の現地踏査によって、遺物の散布状況や地形環境等を調査・観察し、必要と判断された範囲について、計９箇所のトレンチを設定し実施した。試掘調査の詳細については、既に報告書が刊行されている（香川県教育委員会 2008、同 2009、同 2014）。また、この結果に基づき香川県教育委員会では、中讃土木事務所と再度協議を行い、平成 26・27 年度に香川県埋蔵文化財センターが本発掘調査を実施することで合意した。

第２節　調査と整理の経過

発掘調査は、上述した試掘調査の結果、事前の保護処置が必要と判断された 1,892㎡について、平成 28 年２月１日より同年６月 30 日の５か月間実施した。平成 27 年度は東側 757㎡（Ⅰ区）、翌 28 年度は西側 1,135㎡（Ⅱ区）の調査を実施した。調査は、香川県土木部から依頼され、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが担当し、現場作業員を直接雇用する直営方式で行った。なお、５月 14 日には地元住民を対象とした説明会を現地において実施し、45 名の方々の参加があり、熱心にメモを取るなど関心の高さが伺えた。

整理作業は、平成 30 年４月１日より同年６月 30 日及び翌平成 31 年２月１日より同年３月 30 日の５ヶ月間、香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と、遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物は、土壌サンプルを含め 28㍑入りコンテナ 77 箱である。本報告を作成するにあたり、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構・遺物について報告することを原則とした。また、調査時に作成した図面については、ほぼすべてを本書に掲載し、撮影した写真も、類似したカットを選択するなどして、必要最低限のものを収録した。

遺物の整理に際して、遺物実測の一部を平成 30 年度に株式会社イビソク香川営業所に、金属器（**391**・**408**）の保存処理を平成 30 年度にパリノ・サーヴェイ株式会社に、木製品（**134**・**139**・**428**）については令和元年度に株式会社吉田生物研究所にそれぞれ委託して実施した。また、自然科学的分析については、自然河川 SR01 出土の縄文時代晩期の木材の樹種同定を明治大学黒曜石研究センターの能城修一・佐々木由香両先生に、SR01 出土の縄文時代晩期の花粉化石群の分析を古代の森研究舎の吉川昌伸先生に依頼し、それぞれ玉稿を賜ったほか、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社イビソク香川営業所、株式会社パレオ・ラボの各社に委託して実施した。

参考文献

香川県教育委員会 2008『埋蔵文化財試掘調査報告ＸＸＩ　平成 19 年度　香川県内遺跡発掘調査』

香川県教育委員会 2009『埋蔵文化財試掘調査報告ＸＸⅡ　平成 20 年度　香川県内遺跡発掘調査』
香川県教育委員会 2014『埋蔵文化財試掘調査報告ＸＸⅥ　平成 24 年度　香川県内遺跡発掘調査』

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

中又北遺跡は、香川県仲多度郡多度津町道福寺に所在し、現在の海岸線より概ね内陸２㎞の丸亀平野北西部に位置する。多度津町は、東を丸亀市、南は善通寺市、西は三豊市とそれぞれ接し、北には瀬戸内海を介して岡山県浅口市・笠岡市が所在し、香川県の北西臨海部に位置する。

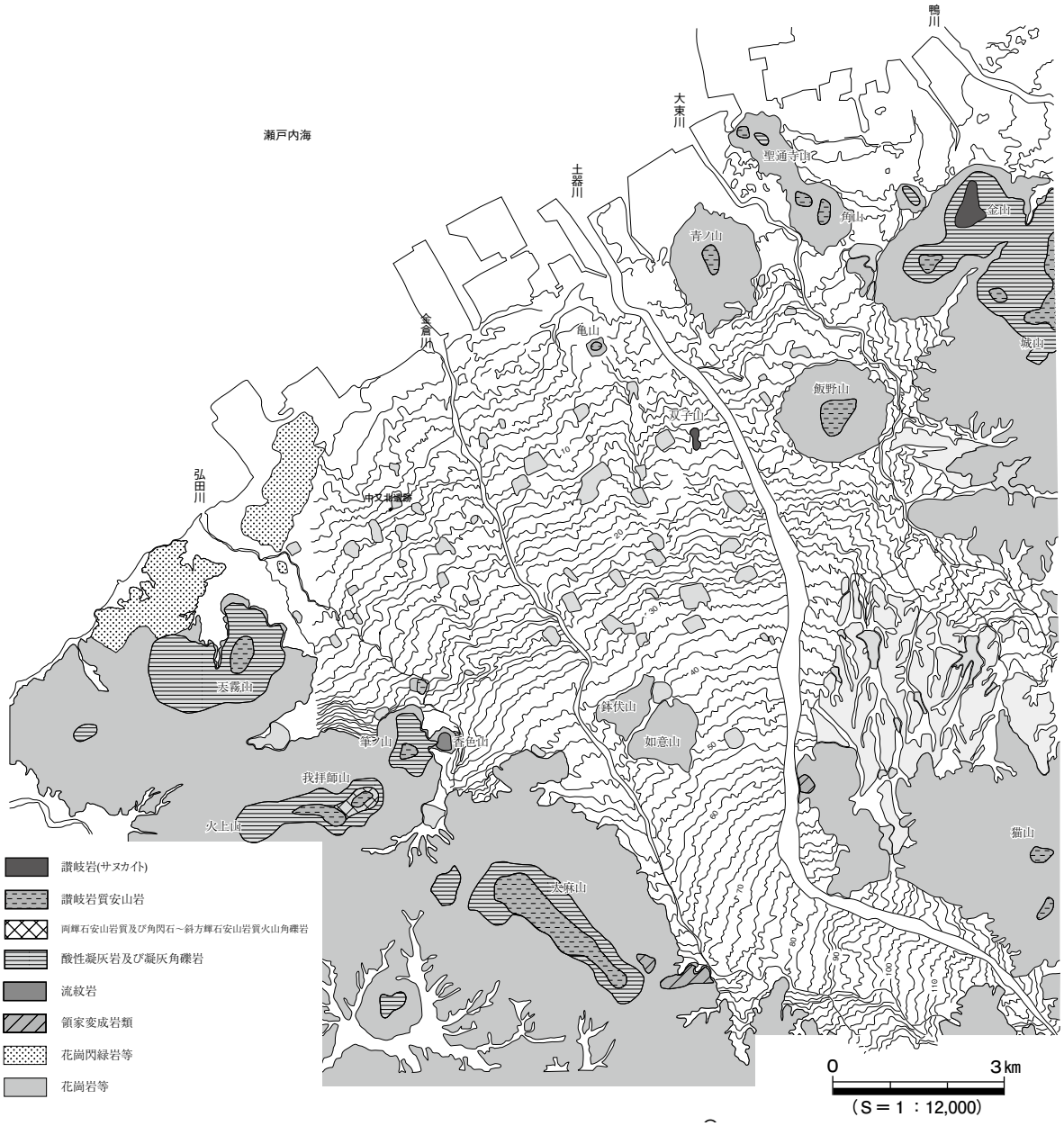
遺跡周辺は、多度津町市街地南部の農村部に位置するが、近年の道路網の整備などにより急速に宅地化が進展しており、地表面に残されていた微起伏は消滅し、現地表面から古い地形環境の復元は困難となりつつある。

地形・地質　本県の中央部に位置する丸亀平野（東西約 13㎞、南北約 10㎞、平均勾配約８‰）は、主に平野東部を北流する県内唯一の一級河川である土器川（延長約 3.3㎞、流域面積約 140㎢）によって形成された扇状地性の海岸平野である。平野部東西は、それぞれ瀬戸内海に突出した標高 400 m級の五色台山地や弥谷山丘陵などの山塊によって画され、また南縁は岡田・高屋原・仲南といった上位及び下位台地が取り巻き、北の瀬戸内海に開けた、平面楔状のまとまった地形環境を呈する。平野内には海岸部を中心に、標高 50 ～ 400 m程度のビュートと呼ばれる中小独立丘陵が散在するほか、大束川、金倉川、弘田川などの中小河川が瀬戸内海へ注ぐ。土器川を含め、中小河川の河口域には、現海岸線に平行して数列の砂州・砂堆が形成され、その背後には海岸平野・三角州が広がる。現在、三角州は、その多くが盛土され、多度津や丸亀などの市街地へと変貌している。

平野部周縁の山塊は、後期白亜紀の珪長質深成岩類（領家帯）によって形成され、その上部には約 1,500 万年前の瀬戸内火山活動で形成された、安山岩や玄武岩などの溶岩や火砕岩が堆積する。そのうち、平野東縁部の金山に産出するサヌカイトは、縄文時代以降石器の素材として盛んに利用され、中世以降には火打石として採石されたようだ（蔵本 2019）。また、香色山などに産出する流紋岩は、砥石として弥生時代以降利用され、弥谷丘陵の火砕岩のうち角礫凝灰岩は、中世以降五輪塔の素材として採石され、それぞれ丸亀平野を中心に広域に流通したことが明らかとなっている。平野奥部の讃岐山脈には、後期白亜紀の海成礫岩や泥岩、砂岩などが分布する和泉層群が東西走する。土器・金倉川などは和泉層群中に水源を有し、河床には砂岩などの堆積岩が花崗岩類に混じって多く認められる。こうした和泉層群産砂岩の河床礫も、弥生時代以降の多くの遺跡から、砥石としての出土が確認される。

丸亀平野を流下する最大の河川は上述した土器川であるが、その流路は時代により大きく変化していたようである。かつての流路は、現地表面に痕跡を残し、その埋没した旧流路の復元によって、一部は北西方向へ流下して金倉川に合流し、さらに金倉川を介して、弘田川などに流入していたとされる。つまり、現河川や埋没旧流路などが複雑に分岐・合流して、網目状に丸亀平野を流下して瀬戸内海に流入していたと考えられる。これら土器川及びその旧流路群で縁取られた紡錘形の微高地のいくつかには、後述するように縄文時代後期以降の生活痕跡が残され、人々の生活の舞台となったことが判明している。

現在、平野内を流下する河川流域には、比高約１～２ｍの崖面が観察される。この崖面は、河床の低下により形成されたいわゆる河岸段丘であり、その形成時期は古代末～中世初頭頃と考えられている（木下 1995）。この段丘崖の形成により、既述した流路の固定化と同時に微高地周辺の旧流路の埋没が進捗したようだ。段丘化による影響は、用水体系の変更とともに、それまで氾濫原面で耕地化が困難か、も



第２図　遺跡位置と周辺の地質環境

しくは湿田として収量の劣る低地を燥地化し、農業生産性の増大を招いたことが想像され、本地域の歴史を考える上で、こうした自然環境の変化にも留意しなければならない。

第３図に示したように、本遺跡の所在する段丘面上には、条里型地割に合致して北へ流下する複数の水路が認められる。それら水路は、例えば桜川に代表されるように、現地表面下 1.5 ～２ｍを流下しており、段丘面上に深く刻まれた小規模な谷川のような景観を呈している。こうした水路の開削は、おそらくは古代末以前に遡り、上述した段丘の形成による河床の低下により、それに連動して溝底の下刻が繰り返され、その結果、現状のような深い水路となったことが考えられる。

丸亀平野東縁の飯野山東麓大束川西岸に位置する川津川西遺跡（香川県教育委員会ほか 1999）や東坂元秋常遺跡（香川県教育委員会 2008b）では、そうした灌漑水路の好例が調査されている。両遺跡で調査された水路は、出土遺物により８世紀代に開削され、11 世紀代には廃絶していたことが明らかと

なった。開削初期には段丘面上を流下する大束川を水源としていたが、大束川の河床面の低下により揚水が困難となり廃絶され、中世以降に上流の大窪池を水源とする現在の上井・西又用水へと改修された可能性が想定された（蔵本 2008）。

同様な土器川左岸における大型幹線水路の例として、古子川があげられる。佐藤竜馬氏はその開削時期を 10 世紀代以前とし、その整備には「小地域の開発者相互の結託ないしより上位の権力の介在」の必要性を説く（佐藤 2000）。完新世段丘の形成は、既存の灌漑施設に大幅な改変を強制し、より広域的な地域的結合や開発領主と呼ばれる新規指導者層の擁立を招いたことが想像される。

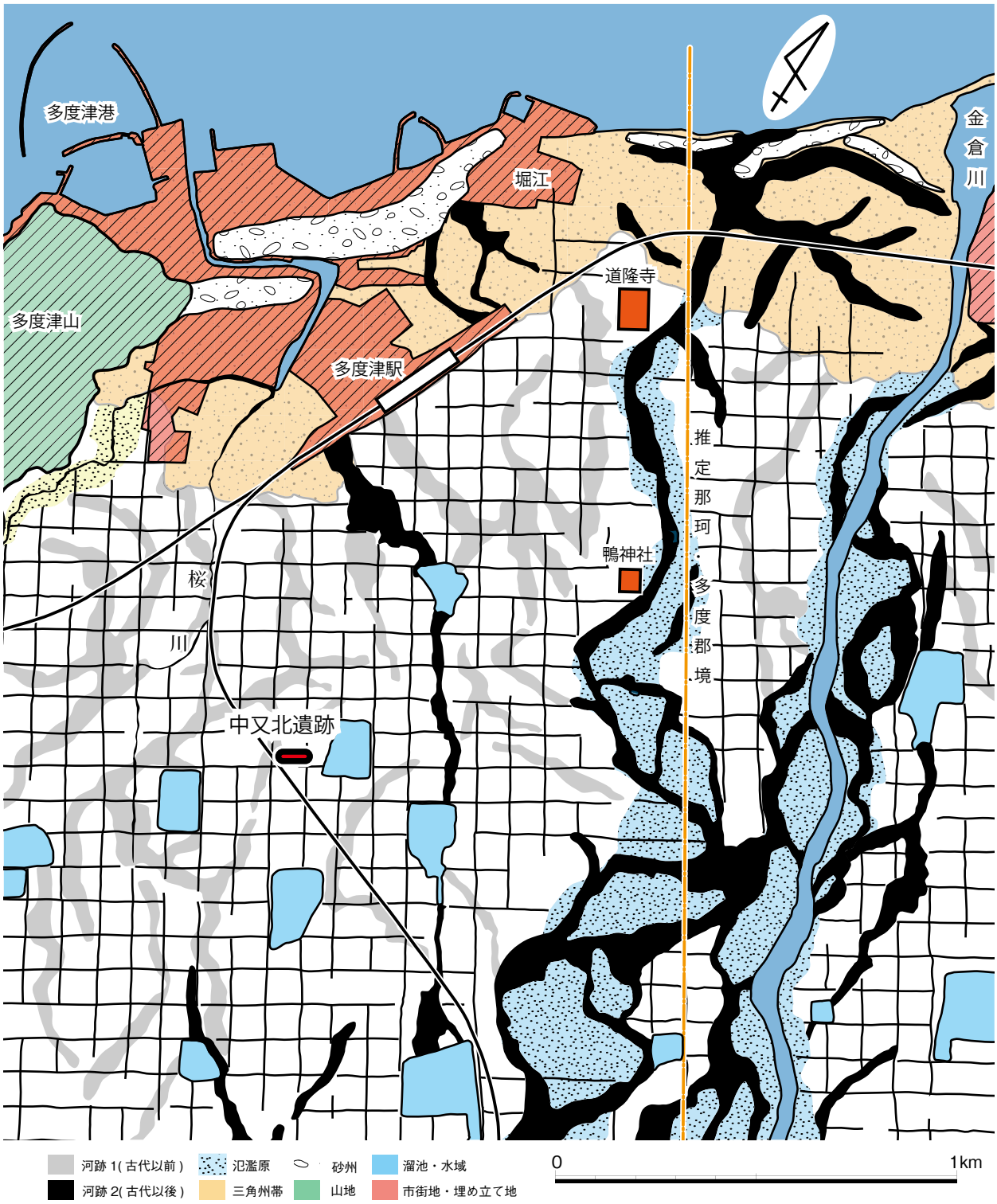
さて、中又北遺跡は、近代以前の旧海岸線より約 1.7㎞内陸で、東西を金倉川と弘田川に挟まれた、幅 3.5㎞程度の平地部のほぼ中央部に立地する。遺跡周辺の現地表面の標高は6.7 m前後で、緩やかに北に下る。遺跡周辺には、周囲の水田の灌漑に供される溜池群が築池され、その多くは皿池の形状を呈する。また、そのうちのいくつかは、金倉川や弘田川の旧流路を利用した谷池ないしは谷池的な構造を認める。

第２節　歴史的環境

遺跡の所在する多度津町周辺では、これまで発掘調査は低調であり、詳細が明らかな遺跡は平成 17 年度に調査された庄八尺遺跡などに限られる。隣接する丸亀市や善通寺市域では、1990 年代以降大規模開発が集中し、数多くの遺跡で調査資料が蓄積されていることと対照的でもある。こうした発掘調査の空疎な状況は、実態とは乖離した部分で、表面的には開発行為による遺跡破壊が低く抑えられているという状況を顕現しているが、一方で、考古学資料を用いた歴史著述は著しく貧困なものとならざるを得ない負の側面も併せ持つ。本地域のような場合、勢い文献史料からの歴史の組み立てが本流となるが、史料の欠落する時代への対応や、考古資料からの実証的裏付、史料に登場しない低位の階層への目配りなどに、大きな課題を抱えることにもなる。こうした点に配慮しながら、以下、本地域の歴史的環境について概説する。

旧石器・縄文時代　天霧山北東麓に位置する西白方瓦谷遺跡の谷部より、縄文時代中期の遺物が出土している。そのほか平野中央部の永井遺跡の自然河川からは、縄文時代後期初頭～晩期中葉の多量の遺物が出土し、土偶や漆塗容器、網籠などの遺物も含まれる。編籠の周辺からは、多量の堅果類が出土しており、堅果類を水漬け保存するための容器として用いられた可能性も指摘されている。また、本遺跡でも晩期中葉の遺物が出土している。調査された遺跡数は乏しいが、丸亀平野北西部の土地利用について、縄文時代中期に丘陵縁辺部より開始され、後期初頭には平野中央部に拡大し、晩期にかけてより広域に展開することが明らかとなった。いずれも自然河川などからの遺物の出土に限られるが、今後は生活域などの調査が待たれる。

弥生時代　三井遺跡では、平成４・７年度に行われた範囲確認調査により、弥生時代前期の溝状遺構などが検出されている（多度津町教育委員会 1994・1995）。遺跡の詳細な内容については今後の調査が待たれるが、遺物の広範な散布が確認されている。また近年の調査では、弘田川下流の奥白方中落遺跡（香川県教育委員会 2008c）や西白方瓦谷遺跡（香川県教育委員会 2012）において、中期～終末期頃の集落跡が検出されたほか、庄八尺遺跡（香川県教育委員会 2009）では終末期の溝が検出されている。奥白方中落遺跡では、中期後半期～後期前半期にかけて断続的に集落が営まれ、とくに中期の竪穴住居跡 3



（信里芳紀 2018「中又北遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 28 年度』，香川県埋蔵文化財センターを一部改変）

第３図　遺跡周辺地形分類図

棟からは磁着微細粒資料が出土し、鉄器生産の可能性が指摘されている（香川県教育委員会編 2008c）。その他、御産盥山や天霧山の山麓部、笠屋や中又、南鴨などの平地部から、土木工事などに伴い、中～後期の土器や石器などが採集され、臨海砂州上に立地する木下遺跡からは終末期頃の土器棺が出土する

など(多度津町 1963･松本 1980)、当該期には比較的広範に人々の生活が営まれていたことが想像される。

古墳時代　集落遺跡は、西白方瓦谷遺跡において、後期終末頃の住居跡が確認され、漁労具などの遺物が出土し、また南鴨遺跡からは、TK208 型式期の須恵器類（壺・甕・器台・瓹・大形高坏）や後期の漁具・須恵器などが採集されており（松本 1980)、臨海部に位置する遺跡の性格の一面を示している。

古墳は、弘田川下流域の白方地区を中心に分布する。白方地区では、舶載三角縁四神四獣鏡が出土した西山古墳（消滅）や、全長 30m の前方後円墳である黒藤山 4 号墳、同 48m の御産盥山古墳など、前期を通じて首長墓墳の築造が継続される。また多度津山西麓の鳥打古墳では、詳細は不明ながら葺石が散在し、埴輪が出土している（多度津町 1963）ことから、前～中期の古墳と考えられる。こうした首長墓墳とは異なり、経尾山（標高 138m）から黒藤山（同 122m）の山麓には、箱式石棺などを埋葬施設とする小規模な円墳や無墳丘の墳墓が、いくつか知られている。こうした埋葬施設からの副葬品は、既述の首長墓墳群のそれと比較すると貧弱である。つまり、本地域の前期の被葬者集団には、墳丘や埋葬施設、副葬品により、集団内部の階層秩序は明確に整備されつつも、なお墓域を共有するなどの特徴を読み取ることができる。

弘田川下流域での古墳時代の安定した微高地は、周囲の山塊縁辺や山階地区以南の内陸部に展開するようである（木下 1998)。可耕地に乏しい本地域に、前期古墳が継続して築造された要因としては、やはり瀬戸内海の海上交通との関係が想定されよう。本地域で「やまじ」や「わいた」などと呼ばれた季節風を遮る経尾山（標高 138m）や黒藤山（同 122m）が西に屹立し、弘田川河口部は大きく内湾して入り江をなし、入り江奥部に港津としての流通拠点が形成されていたことを想定したい。瀬戸内海の眺望に優れた御産盥山古墳などは、海上を航行する船舶からは、ランドマークとなったことも想像できる。

弘田川下流域の港津機能を背景とした優位性は、中期にも継続する。現状では既述した前期の首長墓系列と断絶する可能性が高いが、段丘面上に径約 42m で二段築成の円墳、盛土山古墳が築造される。埋葬施設は組合せ式石棺とされ、大正４（1915）年に、舶載画文帯環状乳神獣鏡１、鉄刀１、瑪瑙勾玉１、硬玉勾玉２、銅鈴１などが出土している。近年の調査により、二重周溝が確認され、円筒・蓋などの埴輪が出土した（香川県教育委員会 1998・多度津町教育委員会 1999)。出土した埴輪などから、5 世紀中頃の築造が想定される。盛土山古墳から西へ約 60m 離れて、一辺約 10m の方墳、中東 1 号墳がある。平成 11 年度の発掘調査により、墳丘は中世以前に削平されていたが、周溝から円筒・朝顔形埴輪が出土している（香川県教育委員会ほか 2003b)。出土遺物より盛土山古墳とほぼ同時期に築造されたと推定され、陪冢的な性格を有する古墳と評価される。また東北浦古墳からは、箱式石棺より仿製捩文鏡や勾玉が出土したとされる。西白方瓦谷遺跡では、墳丘は削平されていたが、数基の小規模な円墳に伴う周溝が検出され、須恵器などが出土している。

後期古墳も、弘田川流域を中心に展開する。天霧山北東麓に向井原古墳、黒藤山南麓に北ノ前古墳、多度津山南西麓に宿地古墳、同北西麓に向山古墳などが知られており、いずれも６世紀後半期～７世紀前半期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。向井原古墳は、一墳丘に二石室を有する古墳として著名である。これらの古墳は、玄室長約 3.8m の宿地古墳を最大として、いずれも中・小規模の石室墳であり、弘田川上流、善通寺地域の王墓山古墳、菊塚古墳、宮が尾古墳、大塚池古墳などとは、大きな格差を見ることができる。丸亀平野西縁部の集団において、より広域的な政治的編成がなされたことを反映していると考えられる。

（国土地理院 1/25,000 地形図「丸亀」・「讃岐粟島」・「仁尾」・「善通寺」を一部改変）

１．中又北遺跡（縄文晩～近世）
２．経尾山１号墳（古墳）
３．御産盥山古墳（古墳）
４．経納山古墳（古墳）
５．経尾谷１号墳（古墳）
６．西白方瓦谷遺跡（縄文～古代）
７．経尾谷２号墳（古墳）
８．東北浦古墳（古墳）
９．朝日山古墳（古墳）
１０．黒藤窯跡（古墳）
１１．黒藤山５号墳（古墳）
１２．黒藤山４号墳（古墳）
１３．黒藤山２号墳（古墳）
１４．黒藤山１号墳（古墳）
１５．黒藤山３号墳（古墳）
１６．鳥越１号墳（古墳）
１７．鳥越３号墳（古墳）
１８．鳥越２号墳（古墳）
１９．黒戸山古墳（古墳）
２０．西山古墳（古墳）
２１．北ノ前古墳（古墳）
２２．奥白方中落遺跡（弥生～中世）
２３．寺前古墳（古墳）
２４．中東遺跡・中東１号墳（古墳）
２５．盛土山古墳（古墳）
２６．奥白方南原遺跡（弥生～中世）
２７．向井原１号墳（古墳）
２８．向井原２号墳（古墳）
２９．八王寺古墳（古墳）
３０．弥谷山古墳（古墳）
３１．天霧城跡（中世）
３２．熊手八幡宮（中世～）
３３．仏母院
３４．西谷古墳（古墳）
３５．徳公塚古墳（古墳）
３６．鳥打古墳（古墳）
３７．向山１号墳（古墳）
３８．向山２号墳（古墳）
３９．前山塚古墳（古墳）
４０．来付１号墳（古墳）
４１．来付２号墳（古墳）
４２．宿地古墳（古墳）
４３．公徳寺跡（中世）
４４．転石古墳（古墳）
４５．有経塚（中世）
４６．野津古塚（中世）
４７．木下遺跡（弥生）
４８．多度津（本台山）城跡（中世）
４９．願成寺跡（中世）
５０．五段岡碑（中世）
５１．観音堂跡（中世）
５２．庄八尺遺跡（弥生～近世）
５３．薬師堂跡（中世）
５４．桑木古墳（古墳？）
５５．泉屋敷跡（中世？）
５６．西村塚２号墳（古墳？）
５７．西村塚１号墳（古墳？）
５８．東西神社古墳群（古墳）
５９．天霧山麓シスト群（古墳）
６０．三井遺跡（弥生）
６１．永井北遺跡（古代～中世）
６２．稲木北遺跡（古代）
６３．中村城跡（中世）
６４．鬼塚（中世？）
６５．梅ノ木塚（中世？）
６６．ねこ塚（中世？）
６７．親王１号塚（中世？）
６８．親王２号塚（中世？）
６９．仏供田塚（中世？）
７０．親王３号塚（中世？）
７１．道隆寺（中世～）
７２．東林坊塚（中世？）
７３．鍋屋敷跡（中世？）
７４．入道屋敷跡（中世？）
７５．北鴨Ⅰ・Ⅱ遺跡（弥生）
７６．山神塚（中世？）
７７．八幡塚（中世？）
７８．中津城跡（中世）
７９．経塚（中世？）
８０．鴨神社（中世～）
８１．西浦屋敷跡（中世？）
８２．浦屋敷跡（中世？）
８３．西屋敷跡（中世？）
８４．法泉寺跡（中世）
８５．南鴨遺跡（弥生～古代）
８６．葛原大木東屋敷跡（中世？）
８７．道下遺跡（弥生～近世）
８８．一里塚旧址（中世）
８９．実盛塚（中世？）
９０．堀塚（中世？）
９１．いか塚（古墳？）
９２．猫塚（古墳？）
９３．冨田屋敷跡（中世？）
９４．小塚遺跡（弥生～近世）
９５．金蔵寺陣所址（中世）
９６．金倉寺跡（古代～）

第４図　周辺遺跡分布図

生産遺跡としては、黒藤山北東麓の黒藤窯跡がある。本窯跡は、TK10 型式期の須恵器窯であり、周辺では同時期の首長墓墳は現状では知られていない。弘田川を遡った王墓山古墳と時期的に接近し、おそらくは王墓山古墳の被葬者がその操業に関与していた可能性も考えられる。王墓山古墳の横穴式石室では、九州系の石屋形が採用されており、本窯の導入の契機についても、今後、畿内及び九州との関係の中で検証する必要があろう。

古代　当遺跡周辺は、令制下多度郡に属し多度郡に置かれた 8 郷（近年、奈良県石神遺跡より「多度評難田」と記された 7 世紀代の木簡が出土し、8 郷にはない「難（方）田郷」の存在を想定する意見もある）のうち葛原郷に含まれる（『和名類聚抄』）。多度郡の郡司には、国造級豪族として佐伯直氏が、中・下級豪族として判良田連氏が、『類聚国史』などの史料に散見される。郡司層ではないが、『日本三大実録』にみえる因支首氏も、多度郡に住した豪族である。いずれも多度郡南部を基盤とする豪族とみられ、即断はできないが、既述した古墳時代最後の首長墓墳の偏在を反映している可能性も考えられる。

調査がなされた当該期の遺跡には、弘田川下流域に位置する奥白方中落遺跡（香川県教育委員会 2008c）がある。中落遺跡では、８～９世紀代の掘立柱建物跡 6 棟が検出されている。それら建物遺構の周辺から、明確な遺構に伴うものではないが、皇朝十二銭のうち「隆平永寶」10 枚が重ねられて出土した。何らかの祭祀儀式に使用された可能性が想定されるが、出土状況から明確なことは断定できない。隣接する奥白方南原遺跡（香川県教育委員会 2008c）では、緑釉陶器碗が出土しており、周辺に下級官人もしくは富農層が居住していたことが想像される。そのほか南鴨遺跡周辺で、奈良～平安時代の土器が採集されており（松本 1980）、近在に当該期の集落の存在が予想される。

遺跡周辺の平地部には、南北方向の径溝が約 30° 西に偏した、いわゆる一町方格の条里型地割が広範に展開する。こうした地割が、古代の土地表示システムに起源を有することは論を待たないが、郡内を一律にほぼ同時期に施工されたものでもないことも、明らかとなってきた。また、多度郡の条里プランの復原は宮内庁書陵部所蔵の久安元年（1145）讃岐国善通曼荼羅寺領注進状をもとに、金田章裕氏により復原されている（金田 1988）。この復原案によれば、中又北遺跡は二条 13 里 19 坪に位置する。既述したように、本地域の条里型地割のすべてが、古代に施工されたものであるとは断言できないが、隣接する庄八尺遺跡の調査によって、遺跡周辺ではその施工が遅くとも 9 世紀代に遡ることが明らかとなった。一方、段丘Ⅱ面上に位置する奥白方南原遺跡では、七条 13 里内部の坪界溝が検出され、溝より出土した最も古い遺物の一群は 12 ～ 13 世紀に位置付けられる。しかし、約 500m 西に位置する奥白方中落遺跡で検出された 8 世紀中頃の掘立柱建物跡 SB09・SB14 は、条里型地割の方向と合致するという。条里プランが一定の面を対象に施工されたものであるなら、中落遺跡の建物設置時には周辺の地割が施工されていた可能性は高く、南原遺跡の坪界溝は中世段階での延伸か改修の可能性が想定される。

古代南海道の位置については、残念ながら正確なことはわからない。那珂郡の推定ラインより直線的に西へ延長し、多度郡の 6 里と 7 里の里界線に求める意見がある。（金田 1988）。那珂郡における南海道の推定には、余剰帯の存在が大きな根拠とされている。また、善通寺文書の宝治三年（1249）の讃岐国司庁宣にある「北限善通寺領五嶽山南麓大道」について、「五嶽山」を香色山や筆の山、我拝師山に擬することによって、推定南海道のライン上に「大道」が矛盾なく合致することも、その有力な傍証とされている。

こうした歴史地理学からの検討とは別に、考古学の立場からは、善通寺市四国学院大学構内遺跡の調

査で検出された７世紀代の直線溝 SD01・13・14・16 について、南海道の側溝に比定する意見もある（善通寺市教育委員会 2003）。残念ながら、遺構面は大きく削平されたためか、考古学的に道路遺構と積極的に評価する実証的な根拠に乏しく、なお周辺の調査や検討を要する。いずれにせよ古代南海道が、国造佐伯氏の本拠とされる弘田郷や仲村郷、あるいは有岡古墳群を擁する生野郷内を東西に横断していたであろう可能性は高く、四国学院大学構内遺跡で確認された直線溝の再検討とともに、さらなる考古学的な調査を待つ必要がある。

多度津地域で確実に古代まで遡る寺院の存在は知られていない。やや範囲を広げて多度郡内では出土した古瓦から、古代寺院として善通寺、仲村廃寺、曼荼羅寺、金倉寺などが知られ、曼荼羅寺や金倉寺を除き、その創建は白鳳期に遡るとされる（高松市歴史資料館編 1996）。佐伯直氏と善通寺との関係はもとより、上述した有力豪族が古代寺院の檀越であった可能性は高い。

多度津という地名に関して、それを多度郡の郡津、郡家所管の港津としての機能を備えた公的施設を指すとの意見がある（高重 1966・千田 2001）。文献史料上に「郡津」の表記がみられないことなどから、制度として「郡津」が定められていたことは断定できないが、物資輸送の利便のため陸上交通とともに水上交通が頻用されたことは疑いなく、多度郡臨海部に郡家正倉との物資出納に使用された港津が所在したことは想定される（金田 1988）。文献史料上での「多度津」は、土佐国香美郡楠目村（現高知県香南市土佐山田町楠目）吉祥寺所蔵の涅槃像表装の裏書にある「奉施入讃岐国多度津毘沙門堂…嘉元三季十月日　絵師都大夫法眼筆」が初見とされ（竹内編 1985）、古代に遡ることはできない。またこの中世「多度津」の具体的な位置も特定しがたいが、古代においては既述した弘田川河口部などがその有力な候補地と考えられる。

「日本三大実録」貞観六年（864）10 月 15 日に「讃岐国正六位上屋栗神・梶州・天川・宇夫志奈神・賀富良津神等竝従五位下」との神階奉授の記載がある。このうち「屋栗神」以外は『延喜式』に掲載されず、具体的な鎮座地などは未詳である。「賀富良津神」は弘田川河口部に位置する熊手八幡神社に比定する説があり（多度津町 1963）、仮にそうだとすれば、平安期においても弘田川下流域が港津としての機能を有していた可能性は高い。また、こうした弘田川下流域の港津に近接して、既述した奥白方中落遺跡周辺での富農層の存在は示唆的であり、漁労具などの出土とも合わせ、海上交通に何らかの関与をした可能性も想定される。

中世　調査がなされた遺跡には、中東遺跡、奥白方中落遺跡、奥白方南原遺跡、庄八尺遺跡があり、本遺跡においても建物遺構などが検出された。中東遺跡では副葬品を欠くものの本地域では類例に乏しい石棺墓が、また奥白方南原遺跡では白磁碗を副葬した木棺墓がそれぞれ検出された。これら遺跡周辺では、13 ～ 14 世紀前半代に名主クラスの屋敷地が所在していた可能性は高い。

多度津の港津としての機能は中世にも維持される。道隆寺や多度津（本台山）城跡が臨海部に立地するのは、こうした流通拠点の掌握を意図したものであったと考えられる。中世の多度津の具体像については、なお資史料に乏しい。細川家文書にある正安三年（1301）の沙弥孝忍奉書に「堀江庄」とあり、鎌倉幕府地頭の補任地であったとされる（香川県 1987a）。荘域には「堀江津」を含み、幕府の強い影響下にあったようだ。おそらく中世には、この「堀江津」が多度郡の中心的な港津として機能していたと考えられる。

平安期までは、弘田川下流域が多度郡の港津として機能していた可能性を既述したが、文献史料から

は、後述するように中世にはその役割が金倉川下流域に移動した可能性が高い。おそらく弘田川下流域は、古代末以降完新世段丘の形成により、平地部が狭隘なため河口部の後背湿地の埋積が進行し、港津としての機能が維持できなくなったか縮小したと考えられる。

「堀江津」についても、その具体的な場所については不詳である。現在、金倉川の河口付近の西岸に、「堀江」の地名があり、「堀江津」の遺称地とされる。第３図に示した旧地形の復元により、多度津山より砂州が北東方向に長く延び、一部途切れているもののその東端は金倉川西岸に達する。この砂州の南側は、海水が侵入して潟となっており、内陸部より桜川が緩やかに流入する。おそらくは内陸部側に港湾施設が設けられ、「堀江津」と呼ばれていたと考えられる。内陸北端に位置する道隆寺は、海上部からのランドマークとしての機能と、港津の管理施設としての機能を兼備していたのかも知れない。道隆寺より南進する町道は、鴨神社・金倉寺を経て、中世南海道にアクセスしていたと想像される。

貞治四年（1365）讃岐守護細川頼之に宛てた足利義詮御教書には、「讃岐国葛原庄、堀江津両所公文職云々」とあり、14 世紀後半には葛原庄と堀江津の公文職は兼務されていた。後述するように、葛原庄は賀茂神社領となっており、両所の公文職が兼務されていたことは、鎌倉幕府滅亡後は堀江津が賀茂社の管理下に置かれていたことを想像させる。

鴨脚文書「賀茂社社領目録」の寛治四年（1090）７月 13 日官符に、讃岐國葛原庄田地 60 町が御供田として寄進されたことが見え、以後弘安九年（1286）の鴨御祖大神宮政所下分の頃までには、現在の北鴨･南鴨の一帯は、賀茂社領葛原庄として立庄されていたと考えられる。南鴨に所在する鴨神社からは、鎌倉時代の亀山焼巴文軒丸瓦が出土（香川県 1987a）しているほか、室町期以前に移されたとされる紙本大般若波羅蜜多経が所蔵されている。さらに、昭和二十二年（1947）本殿北側の老松の根元より出土した 5,898 枚の銅銭は、漢の五銖銭を最古銭とし、開元通寶や北宋～元銭等が含まれるとされ（多度津町 1991）、鎌倉時代終末期～室町時代前期の中世埋蔵銭の一例である。やや時代は下るが、南鴨の三宝荒神境内には、文安二年（1445）銘のある砂岩製の宝篋印塔があり、鴨神社の神宮寺とされる法泉寺より出土したものと伝える。こうした諸史・資料より神社の創祀が鎌倉時代に遡ることは間違いなく、鴨神社の勧進が、賀茂社領荘園の成立と無縁ではないと思われる。その後、長享二年（1488）賀茂社祝鴨秀顕当知行分所々注文案に至るまで、賀茂社による当庄の支配が続いていたとされる（香川県 1987a）。

安楽寿院は、鳥羽法皇が離宮の東殿を寺として、荘園 14 か所を寄進して成立したが、その荘園のなかに郡名を冠した「多度庄」がある。多度庄の位置は、安楽寿院文書の康治二年（1143）の太政官牒に、「東限三条廿里廿五坪、西限高武例山、北限海、南限四条十二卅坪」と四至が記され、「三井郷の内の、大字三井の大部分を除いた地域全体」で、同時にこの荘域は、東白方に所在する熊手八幡宮の氏子の範囲と一致するという（多度津町 1990）。表記された四至は矛盾が認められるとされる（金田 1988）が、東限が三条に、南限は四条の十二里か十里に、西限の「高武例山」は「多度庄」の名称から天霧山の可能性が高く、上述した奥白方周辺の遺跡や庄八尺遺跡の中世遺構は、「多度庄」を構成する中世村落の一部であった可能性が高い。現在、西白方仏母院の境内には、熊手八幡宮境内から移転したことを伝える、嘉暦元年（1326）銘のある凝灰岩製五重石塔があり、熊手八幡宮の創祀が、鎌倉時代以前に遡る可能性を示唆する。上述した氏子圏が、同時に鎌倉時代まで遡ることを史料上実証することはできない。しかし、12 世紀後半には荘園の鎮守社が史料上に頻出するようになり、「そこでは荘や村の住民の経営によって恒例の神事＝稲作農耕儀礼が挙行される一方、その信仰は住民の精神世界までも捉えるような段階まで達」したことが指摘されている（木村 2003）。こうした指摘を踏まえるなら、多度庄の成立を契機と

して、その荘民の精神的支柱として熊手八幡宮が多度庄の鎮守社に取り込まれたと考えることも許されるのではないかと思われる。

その後「多度庄」は高野山文書の天福二年（1234）の多度庄所当米請文などにみえ、鎌倉時代後期までは存続したと考えられる。室町時代には伝領不詳となり、「永源師壇紀年録」に地頭領の一部である得武名地頭職が建仁寺塔頭瑞応庵領となり、応永三十四年（1427）６月に他の所領とともに安堵されていることを伝える（竹内編 1985）のを最後に、史料上から姿を消す。

道隆寺の開創から貞享三年（1686）までの寺歴を記した「道隆寺温故記」は天正十六年（1588）頃、旧蔵していた古記録をもとに、住持良田により記されたものとされる。それによれば、創建は平安時代初期に遡るとされるが、それを実証する考古資料は未見である。史料や既述した「堀江津」との関係、あるいは寺に伝わる鎌倉時代作とされる絹本着色星曼荼羅図などから、中世前期には建立されていたことは確実と考えられる。「堀江津」の成立と道隆寺の創建もしくは再興が密接に関係することが考えられ、今後周辺の考古学的な調査の進展が期待される。その他中世寺院として、道福寺、徳公寺、法泉寺などが史料上に散見されるが、現状では考古学的調査はなされておらず、場所や内容を詳細に知ることはできない。

城館はいくつか知られている。山城には、天霧城跡があり、昭和 49・51（1974・1976）年に一部の曲輪について発掘調査が実施されている。曲輪の総数 70 余を数える、県下最大規模の中世山城で、讃岐守護代香川氏の詰城とされる。城主の香川氏は、文献史料上には『永源記』所収文書の永徳元年（1381）香川景義寄進状に初見し、石清水文書の応永七年（1400）細川満元遵行状より、香川帯刀左衛門尉が守護代として西讃を統治していたことが想定されている（橋詰 2003）。以後、15 世紀末～ 16 世紀初頭の守護細川京兆家の内部抗争による衰退を契機に、守護料所の押領・所領化や、国人領主層の被官化などを進め、戦国領主として西讃地域に勢力を大きく伸張させる。既述した多度庄や葛原庄が史料上から姿を消していく時期と、香川氏の伸張時期が重なることは、偶然とは考えられない。現在残る天霧城跡のアウトラインはおそらくこの頃に成立したものと考えられる。本城跡の各曲輪には、堀や土塁、石塁、井戸、枡形虎口などの多数の防御施設が確認されている。これらの施設は、おそらく永禄六年（1563）頃の阿波守護三好実休や天正元年（1573）の金倉氏、天正六年（1578）頃の土佐守護長宗我部元親らとの合戦への備えとして、順次増設されたものと考えられる。

一方海浜部に立地し、香川氏の居館とされる多度津（本台山）城跡（香西 1719、橋詰 2003）周辺は、公園として早くに開発されたため、現在では明確な遺構の残存は認められない。香川氏が海浜部に居館を築いた理由として、港津である多度津を掌握し、過書船による利益の獲得が大きな目的であり、香川氏の勢力伸張の原資となったことが説かれている（橋詰 2003）。多度津城の築城時期は不詳ながら、おそらくは守護代として西讃を領有した 14 世紀終末期～ 15 世紀初期以降のことと思われる。この頃には未だ賀茂社による葛原庄の支配は継続しており、堀江津が多度郡内の港津機能の大きな部分を担っていたことが想像される。香川氏の勢力伸長期にあたる 15 世紀末以降、多度津城に近接する位置へ港津機能は移動したことが想像され、それは『兵庫北関入舩納帳』に「堀江津」ではなく「多々津」と記載されていることとも関係するものと考えられる。

平地居館としては、入道屋敷跡や鍋屋敷跡、西浦屋敷跡などが知られている。地理的には、道隆寺周辺と鴨神社周辺に集中する。前者は道隆寺との関係が、後者は葛原庄々官との関係が説かれている（香川県教育委員会 2003a）。城館の可否を含め、考古学的な調査が今後必要である。

16 世紀後半、阿波三好義賢や土佐守護長宗我部元親の勢力拡張により、一時、讃岐は三好氏や長宗我部氏の領するところとなる。天正十年（1582）、豊臣秀吉は仙石秀久を四国へ遣わし、長宗我部氏と合戦となる。天正十三年（1585）には、仙石秀久ら四国征討軍と長宗我部氏との間に和議が成立し、讃岐国は秀久に与えられ、讃岐の中世は終焉を迎える。その後香川氏は長宗我部氏に従い土佐に下ったため、天霧・多度津両城は、廃城となった。

さて、遺跡の所在する「字道福寺」の地名は、戦国期頃まで周辺に所在した禅宗道福寺に由来するとされる。道福寺は、江戸中期に成立したとされる「扶桑五山記」に、京都東福寺開山の円爾の弟子妙翁弘玄もしくは同門の虎関師錬を開山と記す。これが事実とすれば、創建は 13 世紀後半頃と考えられるが、そこまで遡るかどうかは現状では不明である。応永十年（1403）には、東福寺 80 世で讃岐出身の岐陽方秀の入寺が確認（岐陽自賛）され、14 世紀末頃までには建立されていたことは確実であろう。また、諸山に列し、「蔭涼軒日録」永享十年（1438）4 月 20 日条以下に、同時住持任命の公帖発給の記事が散見される（竹内編 1985）。戦国期には衰退したとされ、現在では寺域などは明らかではない。

近世　既述したように、秀吉により讃岐は仙石秀久に与えられるが、その後に入部した尾藤知宣も、九州の島津氏攻略の失策により、短期間で讃岐国を没収される。天正十五年（1587）に生駒親正が讃岐に入部し、翌年高松城を、慶長二年（1597）には讃岐の拠点として丸亀城を築城し、讃岐支配を進めていく。慶長年間には、領内で検地が実施され、その後寛永年間（1624 ～ 44）には、溜池の修築を行なうなど、讃岐支配の基盤整備に尽力する（木原 1997）。しかし、外様大名であった生駒氏は、家臣間の主導権争いを端緒とした生駒騒動により、寛永十七年（1640）に改易となる。

翌年、肥後天草藩主山崎家治が、多度郡を含む西讃 5 万石余に移封され、元和元年（1615）の一国一城令により廃城となっていた丸亀城を再建し居城とする。山崎氏による西讃支配も長続きはせず、明暦三年（1657）には世継ぎ断絶により没収される。

翌万治元年（1658）には播磨龍野藩主京極高和が入部し、寛文十年（1670）には丸亀城が完成する。延宝から寛文にかけて領内に検地が実施され、多度郡山階村などの検地帳が現存する。おそらく寛文年間には、京極氏による西讃支配が確立したものと考えられている（木原 1997）。

元禄七年（1694）年には、二代藩主京極高豊の遺言により、庶子喜内（高道）が分家独立し、支藩多度津藩が 1 万石余として成立する。当初、丸亀城内の西屋敷を多度津藩邸・藩庁としたが、文政十一年（1828）には、海浜部に多度津陣屋が完成し、翌年藩主が入部した。

多度津藩では、寛保二年（1742）の駿府加番以降、藩財政が不安定化する。こうした中、寛延三年（1750）には百姓一揆が勃発し、三井村大庄屋須藤猪兵衛宅が打ち壊されるなど、本遺跡周辺も騒乱の舞台となる。

さて、中又北遺跡周辺は、近世においては多度郡葛原郷道福寺村に属した。既述したように、生駒氏領、山崎丸亀藩領、京極丸亀藩領を経て、元禄七年（1694）以降は多度津藩領となる。道福寺村の村高は、「寛永 17 年生駒氏惣高覚帳」で 566 石余とされ、明和八年（1771）の「多度津藩記録」には生高 448 石余、田畝 34 町 1 反余、畑畝 8 反余、居屋敷 2 町 1 反余とされる。安政五年（1858）に完成した『西讃府志』によれば、租税は米 246 石余、大麦 5 斗余、小麦 2 斗余、大豆 4 石余、家数 84、人数 390（男 209・女 181）、牛 48、馬 2、上池（漑田 12 町余）など池 6、泉 1 であったという（竹内編 1985）。遺跡周辺は、近世には水田稲作を中心とした農村として、近代を迎えた。

文献

安藤文良 2002「金倉寺出土古瓦について」『文化財協会報』第 21 号，善通寺市文化財保護協会
香川県 1987『香川県史』第２巻通史編中世
川野正雄・武田明監修 1989『日本歴史地名大系第 38 巻　香川県の地名』、平凡社
木村礎 2003「村落史研究シンポジウム開催にあたって」『駿台史学』117 号，駿台史学会
木原溥幸 1997「幕藩体制社会の確立」『香川県の歴史』，山川出版社
木原溥幸編 2000『近世の讃岐』，美巧社
金田章裕 1988「条里と村落生活」『香川県史』第１巻通史編原始・古代，香川県
蔵本晋司 1999a「中間西井坪遺跡出土土器の胎土分析」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 32 冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』，香川県教育委員会ほか
蔵本晋司 1999b「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について　－下川津Ｂ類土器の動向を中心として－」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 32 冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』，香川県教育委員会ほか
建設省四国地方建設局編 1998『四国地方土木地質図解説書』
香西成資 1719『南海通記』
千田稔 2001『埋もれた港』，小学館
高桑糺 1974「丸亀図幅の地形区分」『研究報告』第１部第 37 号，香川大学教育学部
高重進 1966「律令的国郡津制の成立と崩壊」『岡山史学』18，岡山史学会
高橋学 1987「高松平野の地形環境分析Ⅰ」『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報　－太田第２土地区画整理事業にともなう遺跡詳細分布調査－』、高松市教育委員会
高橋学 1992「高松平野の地形環境　－弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に－」『讃岐国弘福寺領の調査　－弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書－』，高松市教育委員会
高橋学 1995「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』，古今書院
高松市歴史資料館編 1996『第 11 回特別展　讃岐の古瓦展』
竹内理三編 1985『角川日本地名大辞典』37 香川県，角川書店
多度津町 1963『多度津町史』
多度津町 1991『多度津町誌』資料編
永井久美男編 1994『中世の出土銭　－出土銭の調査と分類－』，兵庫埋蔵銭調査会
日本の地質『四国地方』編集委員会編 1991『日本の地質』８四国地方，共立出版株式会社
橋詰茂 2003「戦国期における香川氏の動向　－『南海通記』の検証－」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』，香川県教育委員会
長谷川修一・斉藤実 1989「讃岐平野の生いたち」『URBAN　KUBOTA』28，久保田鉄工株式会社
松本敏三 1980「香川県出土の古式須恵器」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報』第５号

上記引用文献のうち、発掘調査報告書については巻末に一括して掲載した。

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法

調査対象地は、道路建設予定地のため、南北幅約 27.5 m、東西延長約 91.6 mと東西に長い。調査対象地内には、町道や水路が縦横に走行し、これら既存の施設を維持しつつ、計６小区に区分して調査を実施した。調査区名は、平成 27 年度調査区を１区、平成 28 年度調査区を２区として、道路や水路によって分割された小区画を、それぞれａ～ｄ区と呼称した（第５図）。本書においても、調査時の調査区名を踏襲して以下記載する。なお、調査前の地目は、水田などの耕作地である。

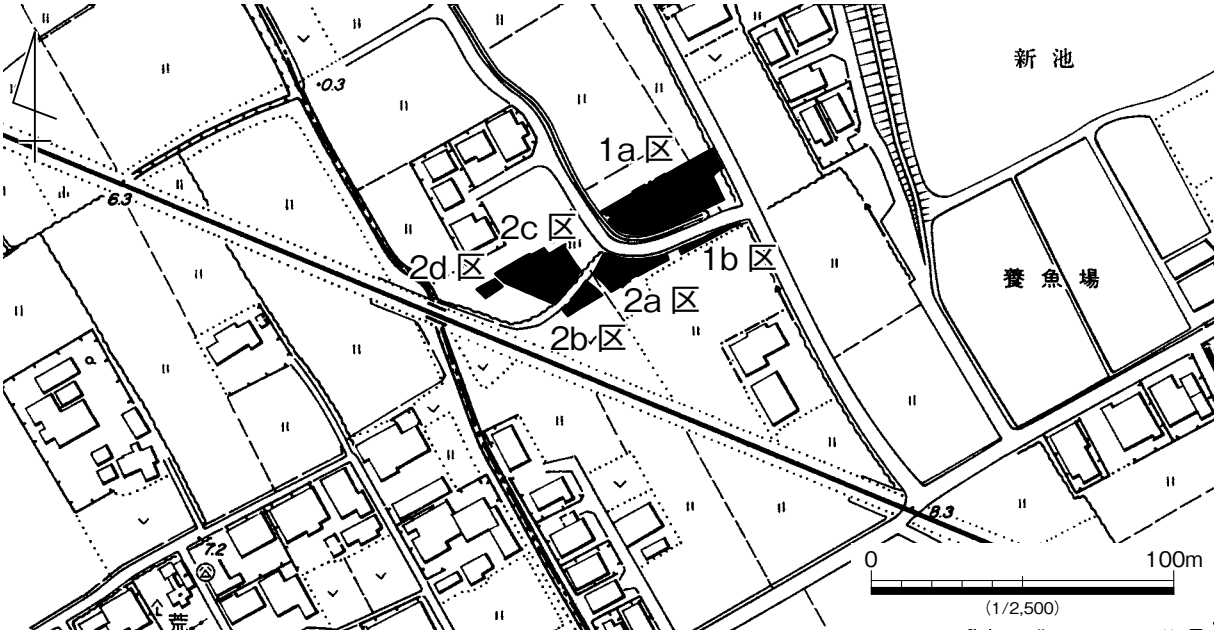
調査は直営方式により実施した。遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力により掘り下げを行った。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。遺構平面図や土層断面図などは、各調査年度の担当調査員などが実測・図化し、遺物出土状況などの写真も調査員が撮影した。

グリットは基本的には設定していない。しかし、2c 区 SR01 下層の調査時には、国土座標に従い４m 四方のグリットを設定して、グリット毎に堅果類などの植物遺体を中心とした遺物の取り上げを行った（第 14 図）。また、その他の調査区では、遺構や調査区単位で遺物の取り上げを行い、必要と認められた遺物については、トータルステーションで出土位置を測量・記録し、出土状況を写真撮影するなどして取り上げた。

遺構名は、調査時には調査年度毎に検出順に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を付して統一した。なお、本報告書作成にあたり、調査時に作成した図面類についてはほぼすべて本書に掲載し、写真などについても可能な限り掲載するよう努めた。

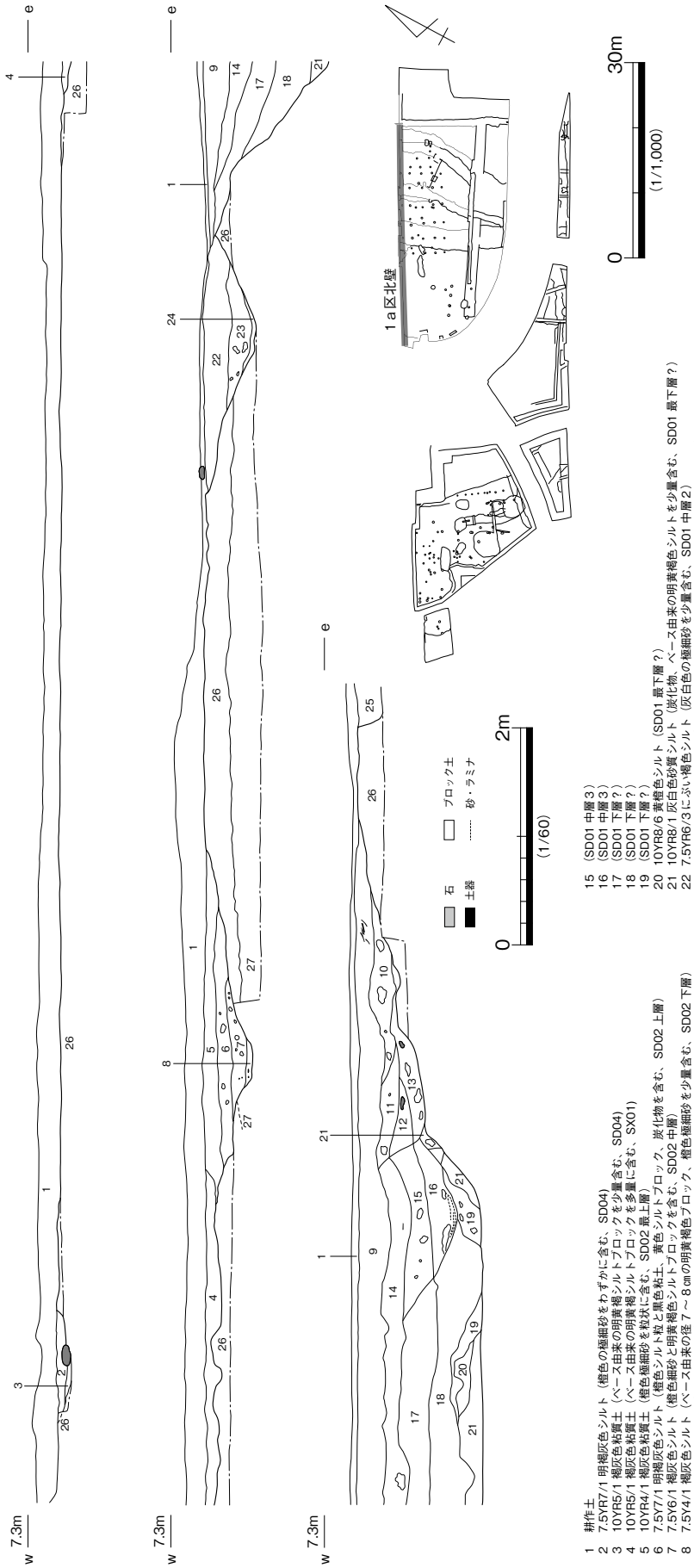
第２節　基本層序

基本堆積層の観察は、2d 区以外の各調査区の壁面において行った。



（多度津町都市計画図No.４を一部改変・加筆）

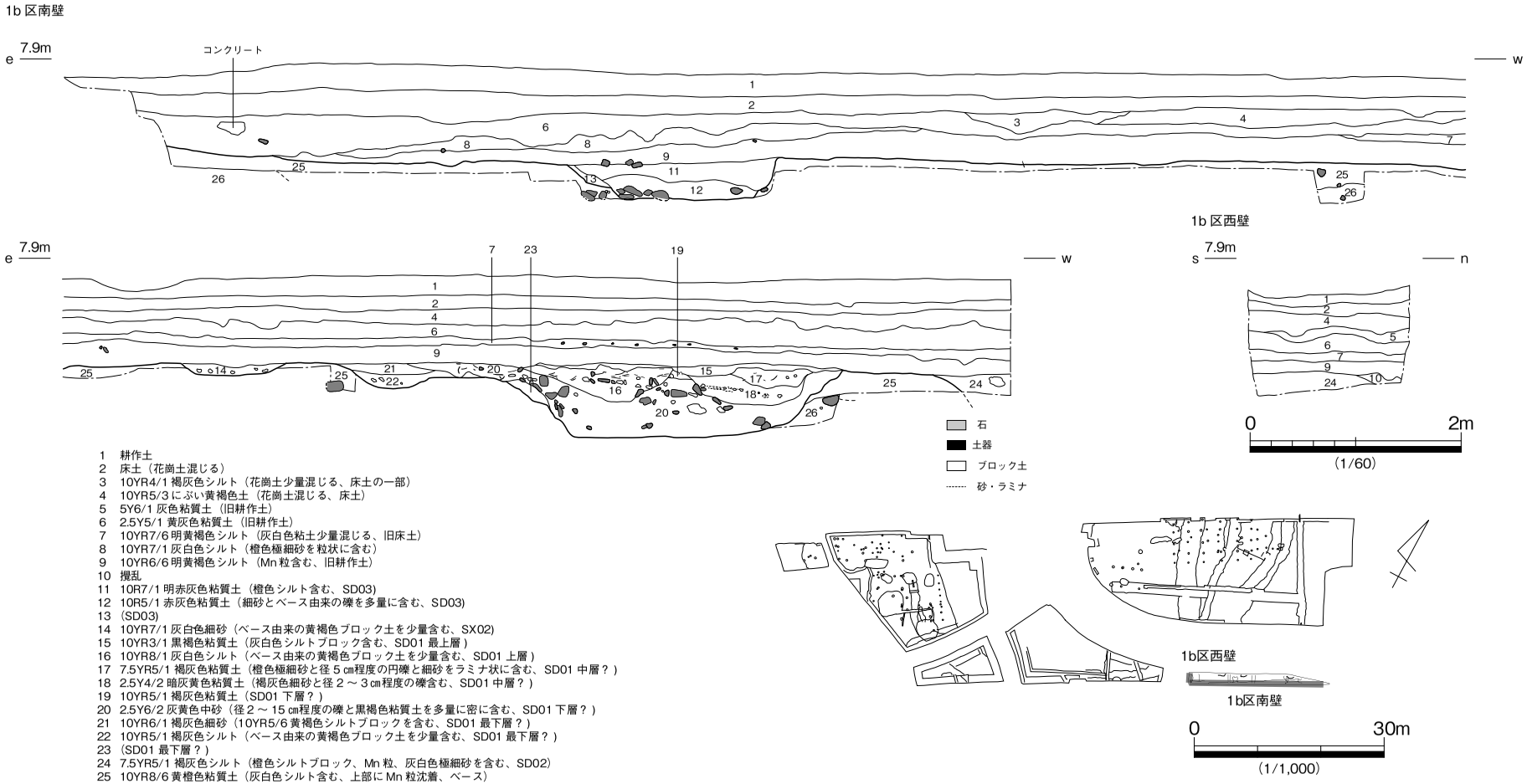
第５図　調査区割図



第６図　1a 区北壁土層断面図

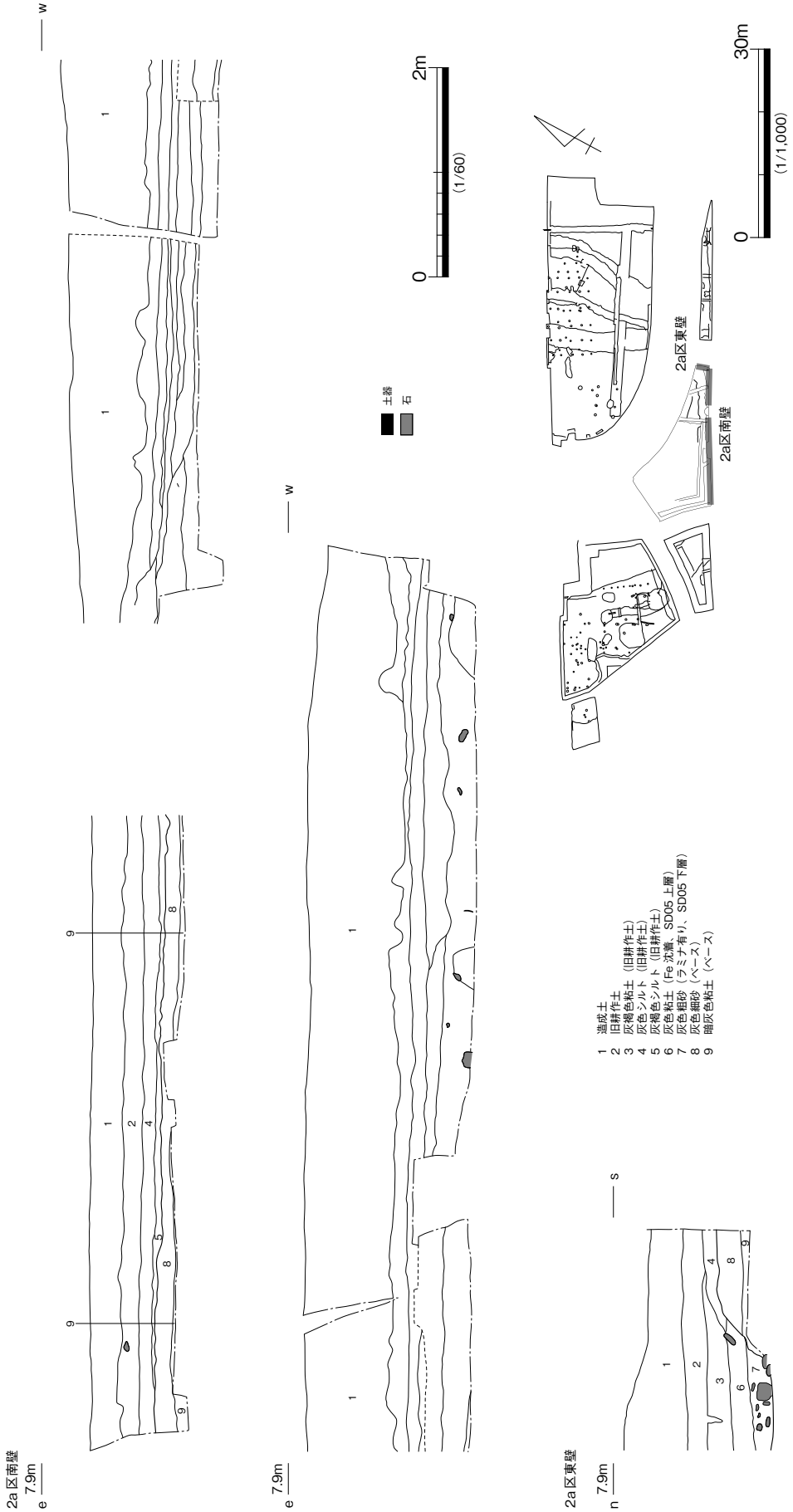
1a 区は、調査区北壁において記録した（第６図）。本区では、耕作土直下で弥生時代以降の遺構面を検出した。包含層などは検出しておらず、遺構面は後世に大きく削奪されたと考えられる。遺構面のベースは明黄褐色シルト（同図 26 層）が広く堆積し、調査において遺物は出土していない。遺構面の標高は、調査区西端付近で 6.90 m前後、同東端付近で 7.00 m 前後をそれぞれ測り、緩やかに西に傾斜する。

1b 区は、調査区南壁と西壁において記録した（第７図）。現地表面の標高は 7.8 m前後であった。現耕作土下に、５～６層に細分される旧耕作土･床土層（同図２～９層）の水平堆積が確認され、その直下で弥生時代以降の遺構面を確認した。こ



1　耕作土
2　床土（花崗土混じる）
3　10YR4/1 褐灰色シルト（花崗土少量混じる、床土の一部）
4　10YR5/3 にぶい黄褐色土（花崗土混じる、床土）
5　5Y6/1 灰色粘質土（旧耕作土）
6　2.5Y5/1 黄灰色粘質土（旧耕作土）
7　10YR7/6 明黄褐色シルト（灰白色粘土少量混じる、旧床土）
8　10YR7/1 灰白色シルト（橙色極細砂を粒状に含む）
9　10YR6/6 明黄褐色シルト（Mn 粒含む、旧耕作土）
10　撹乱
11　10R7/1 明赤灰色粘質土（橙色シルト含む、SD03）
12　10R5/1 赤灰色粘質土（細砂とベース由来の礫を多量に含む、SD03）
13　（SD03）
14　10YR7/1 灰白色細砂（ベース由来の黄褐色ブロック土を少量含む、SX02）
15　10YR3/1 黒褐色粘質土（灰白色シルトブロック含む、SD01 最上層）
16　10YR8/1 灰白色シルト（ベース由来の黄褐色ブロック土を少量含む、SD01 上層）
17　7.5YR5/1 褐灰色粘質土（橙色極細砂と径 5 ㎝程度の円礫と細砂をラミナ状に含む、SD01 中層？）
18　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土（褐灰色細砂と径 2 ～ 3 ㎝程度の礫含む、SD01 中層？）
19　10YR5/1 褐灰色粘質土（SD01 下層？）
20　2.5Y6/2 灰黄色中砂（径 2 ～ 15 ㎝程度の礫と黒褐色粘質土を多量に密に含む、SD01 下層？）
21　10YR6/1 褐灰色細砂（10YR5/6 黄褐色シルトブロックを含む、SD01 最下層？）
22　10YR5/1 褐灰色シルト（ベース由来の黄褐色ブロック土を少量含む、SD01 最下層？）
23　（SD01 最下層？）
24　7.5YR5/1 褐灰色シルト（橙色シルトブロック、Mn 粒、灰白色極細砂を含む、SD02）
25　10YR8/6 黄橙色粘質土（灰白色シルト含む、上部に Mn 粒沈着、ベース）
26　10YR6/1 褐灰色細砂（径 10 ㎝前後以上の礫を多量に含む、ベース）

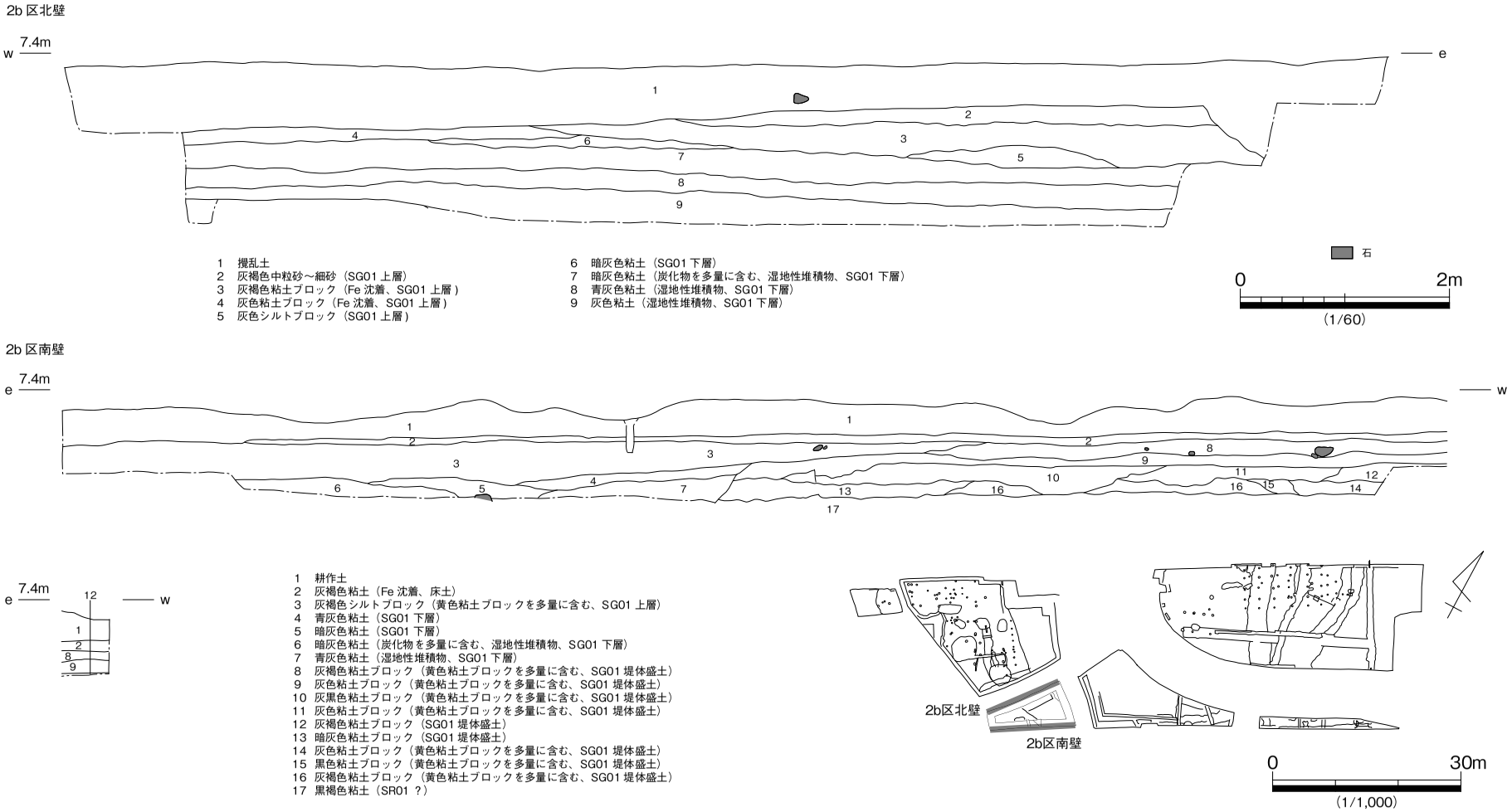
第７図　1b 区西・南壁土層断面図



第８図　2a区東・南壁土層断面図

れら旧耕作土・床土層からは、近世～現代を下限とする遺物が出土している。遺構面の標高は、調査区西端で6.8 m前後を、調査区東端で6.9 m前後をそれぞれ測り、1a区同様緩やかに西に傾斜する。また、1a区とは相対的に0.1 m程度低く、南北方向では南へ緩やかに傾斜している可能性が考えられる。遺構面のベースは、黄橙色粘質土（同図25層）が広く堆積し、調査時に遺物は出土していない。

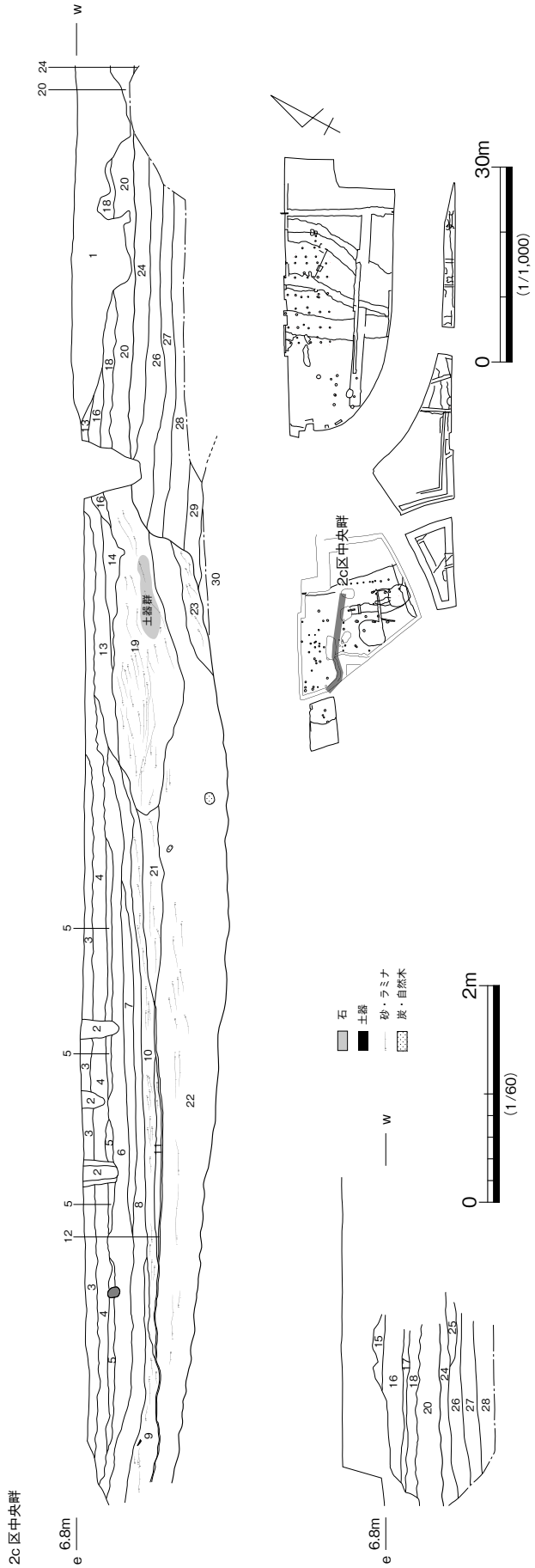
2a区は、調査区南壁と東壁において記録した（第８図）。現地表面の標高は、後述する工事



1　撹乱土
2　灰褐色中粒砂～細砂（SG01 上層）
3　灰褐色粘土ブロック（Fe 沈着、SG01 上層）
4　灰色粘土ブロック（Fe 沈着、SG01 上層）
5　灰色シルトブロック（SG01 上層）
6　暗灰色粘土（SG01 下層）
7　暗灰色粘土（炭化物を多量に含む、湿地性堆積物、SG01 下層）
8　青灰色粘土（湿地性堆積物、SG01 下層）
9　灰色粘土（湿地性堆積物、SG01 下層）

1　耕作土
2　灰褐色粘土（Fe 沈着、床土）
3　灰褐色シルトブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 上層）
4　青灰色粘土（SG01 下層）
5　暗灰色粘土（SG01 下層）
6　暗灰色粘土（炭化物を多量に含む、湿地性堆積物、SG01 下層）
7　青灰色粘土（湿地性堆積物、SG01 下層）
8　灰褐色粘土ブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 堤体盛土）
9　灰色粘土ブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 堤体盛土）
10　灰黒色粘土ブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 堤体盛土）
11　灰色粘土ブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 堤体盛土）
12　灰褐色粘土ブロック（SG01 堤体盛土）
13　暗灰色粘土ブロック（SG01 堤体盛土）
14　灰色粘土ブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 堤体盛土）
15　黒色粘土ブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 堤体盛土）
16　灰褐色粘土ブロック（黄色粘土ブロックを多量に含む、SG01 堤体盛土）
17　黒褐色粘土（SR01 ？）

第９図　2b 区北・南壁土層断面図



第10図　2c 区中央畔土層断面図

に伴う盛土層を除いた旧耕作土上面で7.15 m前後である。本調査区では、上述した最大厚 0.8 m程度の盛土層があり、その下位で造成前の旧耕作土や床土層の水平堆積を３～４層（同図２～５層）確認した。これら旧耕土層下で、近世～近代の溜池 SG01 や近世溝 SD05（同図６・７層）を検出した。調査区西半部では、SG01 の埋土を現地表下約 1.6 m（標高約 6.1 m）まで掘り下げたが池底に達せず、遺構面は溜池の築池により大きく削奪されたものと判断された。また、調査時には多量の湧水がみられ、調査区壁面の崩落の危険があったため、土層図の実測は終えたものの詳細な観察は行えなかった。なお、調査区東端の溜池東岸では、溝 SD05 のベースとして灰色細砂や暗灰色粘土（同図８・９層）の水平堆積を確認し、本層からは遺物は出土せず、無

遺物層と判断した。

2b 区は、調査区南北両壁において記録した（第９図）。現地表面の標高は 7.3 m前後である。本調査区では、2a 区同様ほぼ調査区全面において、現耕作土・床土直下で近世～近代の溜池 SG01 の埋め立て土や堤体盛土を検出した。溜池部分は、検出面下約 1.0 m（標高 5.8 m前後）まで掘り下げたが池底に達せず、本調査区においても築池により遺構面は大きく削奪を被っていることが確認された。堤体部分では、検出面下約 0.5 mで黒褐色粘土（同図 17 層）が露出し、縄文時代晩期の自然河川 SR01 の残存を確認したが、残存範囲が狭く、多量の湧水により安全に調査を進めることは困難と判断したため、以後の調査を断念した。

2c 区は、調査区中央部に設置した東西畔において記録した（第 10 図）。調査区東半部では、溜池 SG01 の西岸を検出し、溜池部を除いた調査区西半部を記録している。現地表面の標高は 7.2 m前後であった。本調査区では、現耕作土・床土及び造成土直下で中世以降の遺構を検出した。本遺構面を第１遺構面とする。第１面の標高は 6.7 ～ 6.9 mである。第１面のベースには、主に灰色ないし褐色系のシルトや粘土、砂層などが堆積し、下位層から縄文時代晩期の遺物がまとまって出土した。堆積状況から自然河川 SR01（同図３～ 23 層）と判断され、これを第２遺構面とする。また SR01 の上面、水平堆積した灰白色～青灰色粘土～シルト（同図３～５層）の下位２層において、弥生時代前期の水田畦畔を検出した。なお、SR01 の下位には、灰色ないし橙色系の砂礫～粘土（同図 24 ～ 30 層）の水平堆積が確認された。１区や２ａ区東部においても、同様なシルトや細砂の水平堆積が確認されており、埋没自然堤防縁辺部の堆積層と考えられる。本層からは遺物が出土しておらず、詳細な堆積時期は不明である。

第３節　遺構・遺物

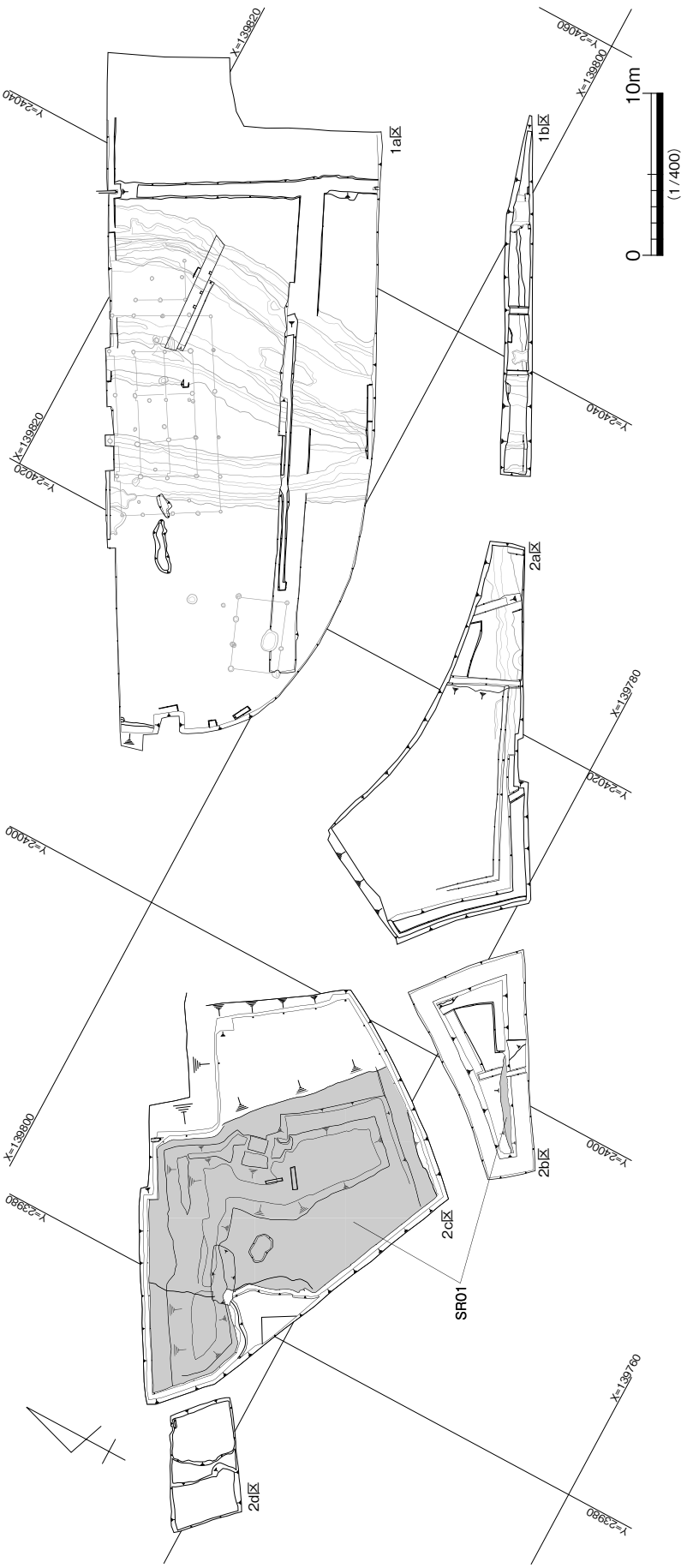
縄文時代

SR01（第 12 ～ 36 図）

2c 区を南北に流下する自然河川である。西岸は調査区外へ延長し、東岸は後述する近世の溜池 SG01 に切られ、全形は不明である。東西 15 m以上の流路幅を有し、後述するように、時期により流路や堆積環境が大きく変化しながら、埋没したと考えられる。埋土は 21 層に細分され、堆積環境や時期を考慮して、最上層（第 10 図３～５層）、上層（同図６～ 14 層）、中層（同図 15 ～ 17 層）、下層（同図 18 ～ 20 層）、最下層（同図 21 ～ 23 層）の５層に大別する。最上層は、前節に既述したように、弥生時代前期中葉～後葉の水田耕土層を分層し、別に報告する。

最下層（第 12・13 図）は、流路東半部に堆積する泥炭質の褐色系粘土層で、ベース灰色系シルト～粘土や砂層（第 12 図 24 ～ 30 層）を削り込んで堆積する。層界付近にみられた細砂により３層に細分したが、巨視的には一連の堆積層と考える。暗色を呈して、平行葉理がみられ、植物遺存体を多く含むことから、酸素供給の乏しい止水もしくは滞水環境下での堆積が想定され、層厚約 0.8 mを測る。第４章に記載した珪藻化石の分析結果から、塩水遡上の影響を受けていた可能性が指摘され、海域に連続した堆積場であった可能性も考えられる。本堆積層の西半上面は、後述する中層の流水堆積により浸食を受け、東半上面は上層堆積により削奪される。

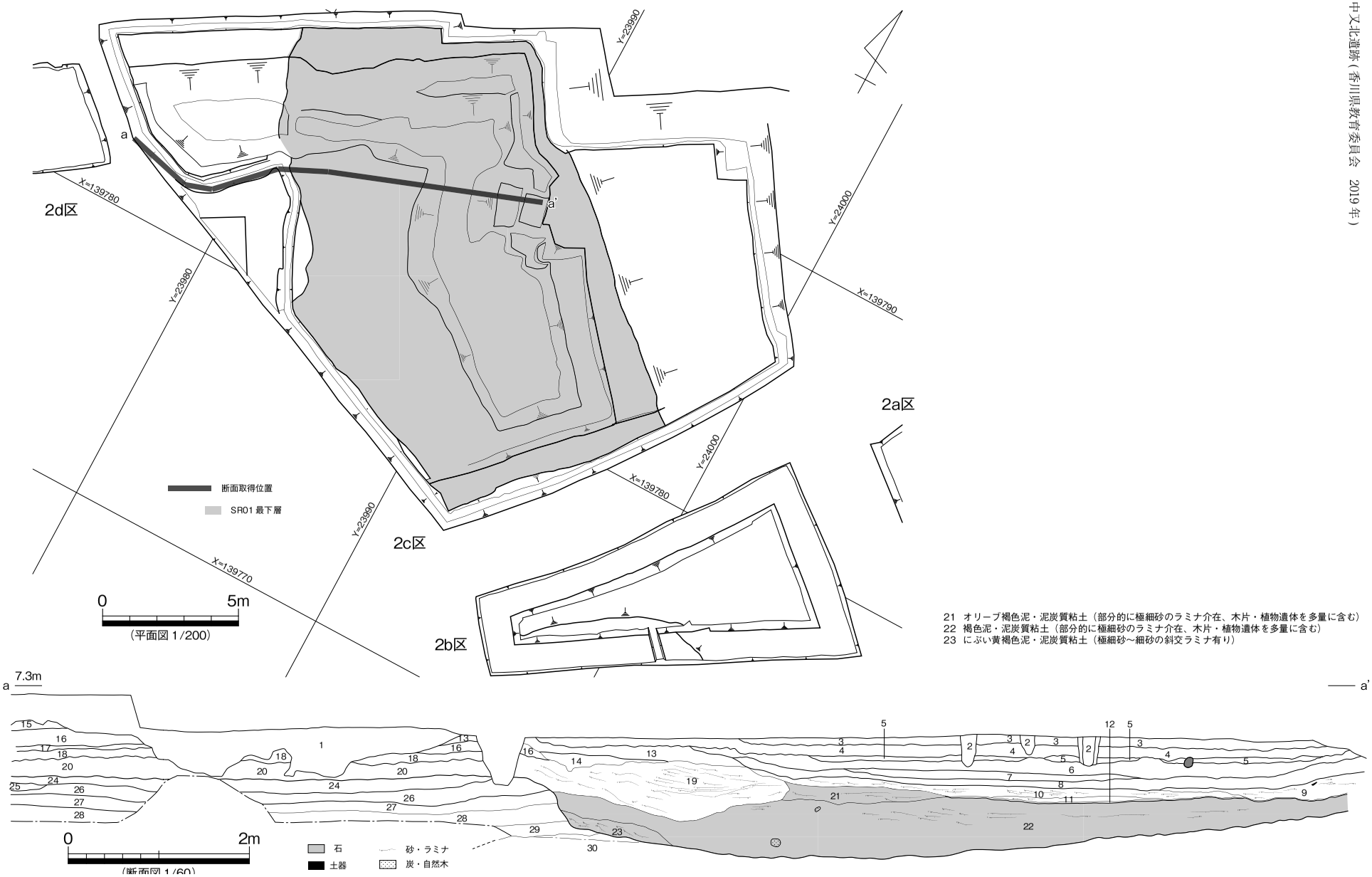
なお、本層から出土した自然木３点について、本層堆積時期を推定するため放射性炭素年代測定を実施した。分析結果の詳細は第４章に記載したが、紀元前 10 世紀初頭～９世紀後半の年代を示し、後述



第１１図　縄文時代晩期遺構配置図

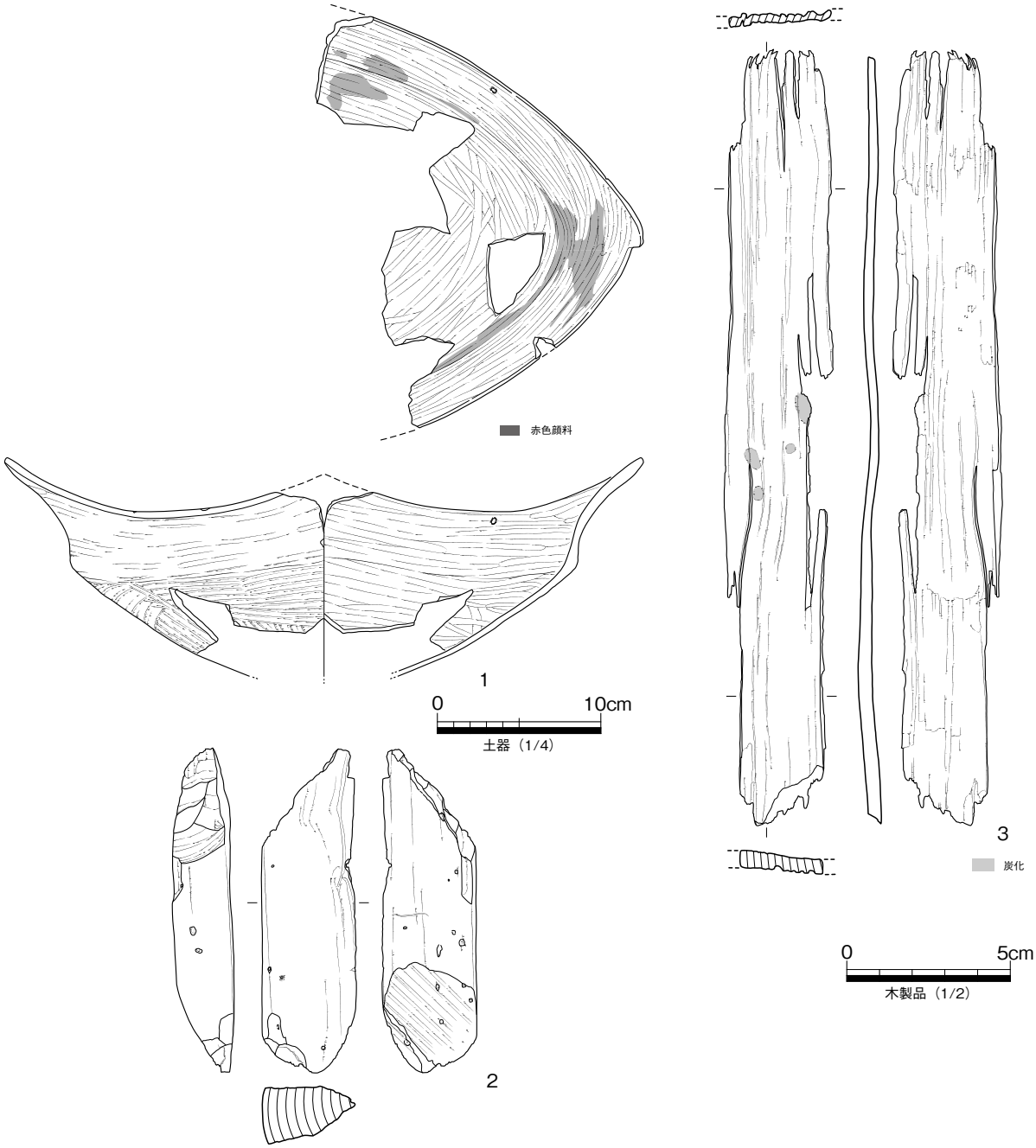
する下層出土の土器内面に付着した炭化物の放射性炭素年代と１点を除いて概ね合致する。上述したように、最下層は滞水環境下での堆積が想定され、出土した自然木などの遺物は、調査地周辺で生育していたもので、その年代は堆積時期を直接示していよう。つまり、分析結果からは、最下層と下層は比較的短期間に堆積した、一連の堆積物である可能性が想定される。下層は、後述するように洪水堆積層で、滞水環境下にあった流路に、何らかの要因で急激な水位の上昇があり、氾濫流路が形成されたと考えられる。その後の流水堆積層は明確ではなく、氾濫堆積により生じた流路東半の窪地は、若干の浸食を伴いながら泥質堆積物により乾燥と滞水を繰り返しながら、徐々に自然埋没したことが想定される。

また、本層のプラント・オパール分析では、水田土壌の目安となる5,000個を大幅に上回る量のイネ機動細胞珪酸体が検出され、埋没途上の自然河川を利用した水田稲作の可能性が指摘されている。本県における水田稲作の開始時期を考察する上で、重要な資料と考えられる。



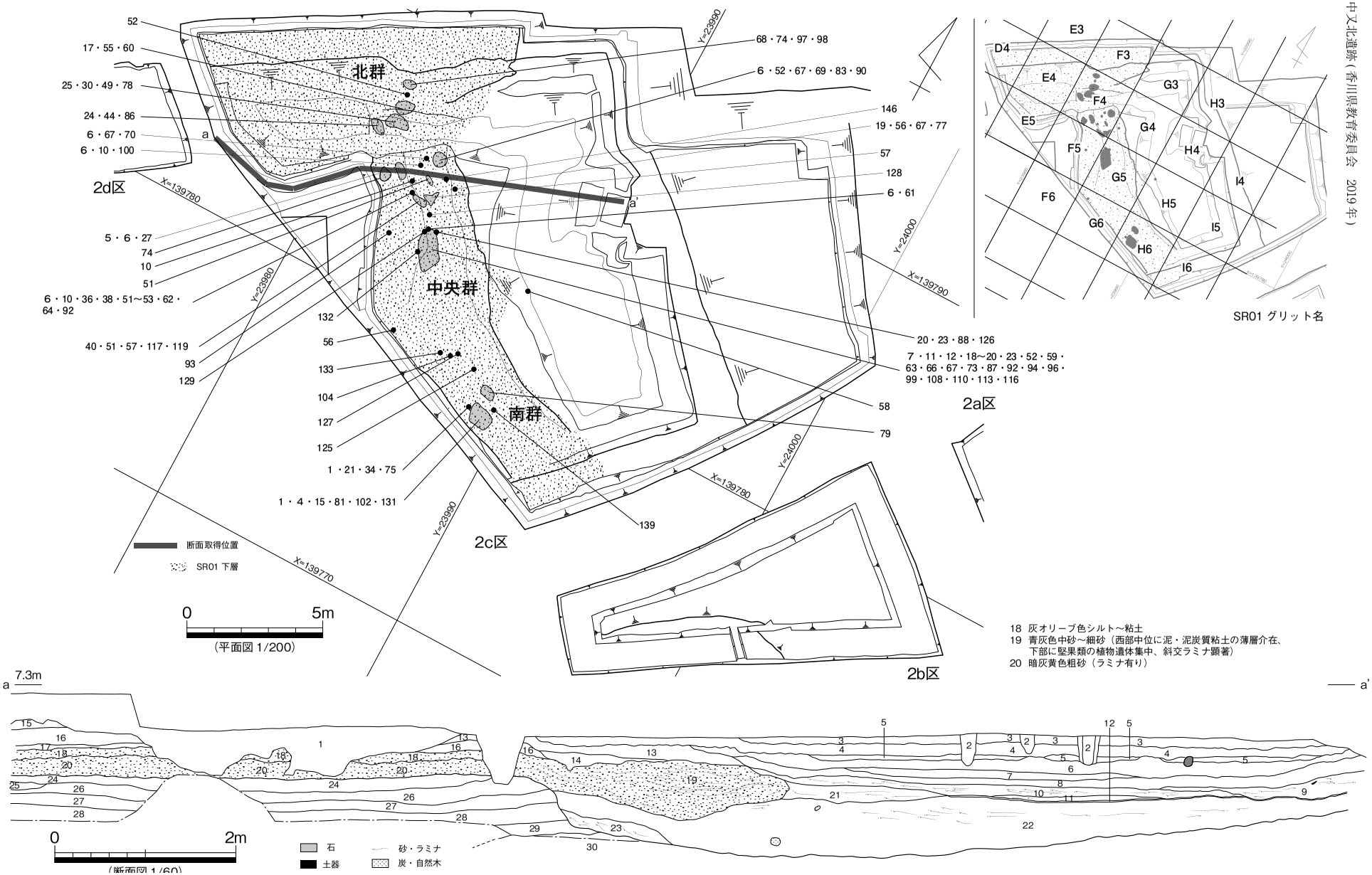
21　オリーブ褐色泥・泥炭質粘土（部分的に極細砂のラミナ介在、木片・植物遺体を多量に含む）
22　褐色泥・泥炭質粘土（部分的に極細砂のラミナ介在、木片・植物遺体を多量に含む）
23　にぶい黄褐色泥・泥炭質粘土（極細砂～細砂の斜交ラミナ有り）

第 12 図　SR01 最下層平・断面図

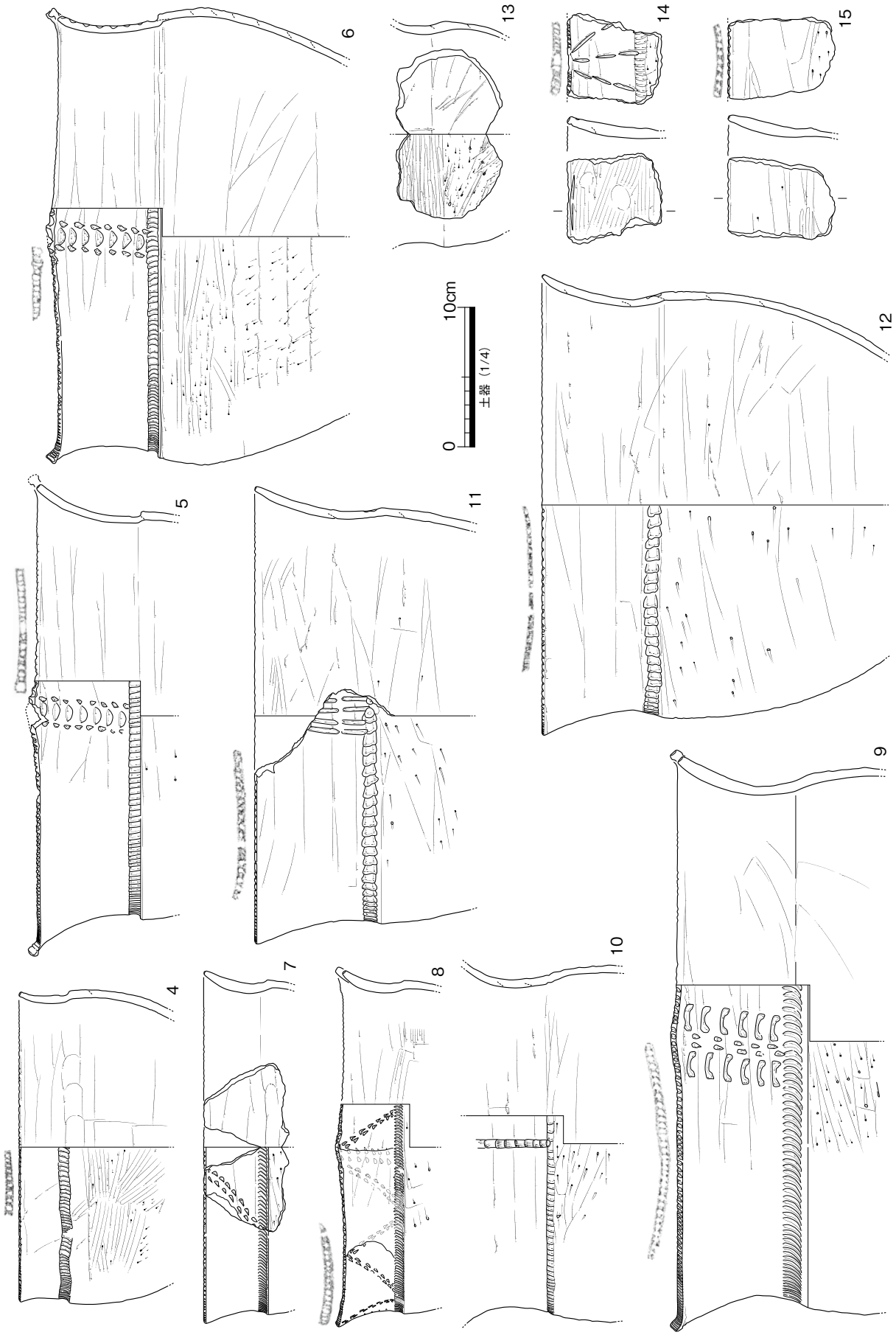


第 13 図　SR01 最下層出土遺物実測図

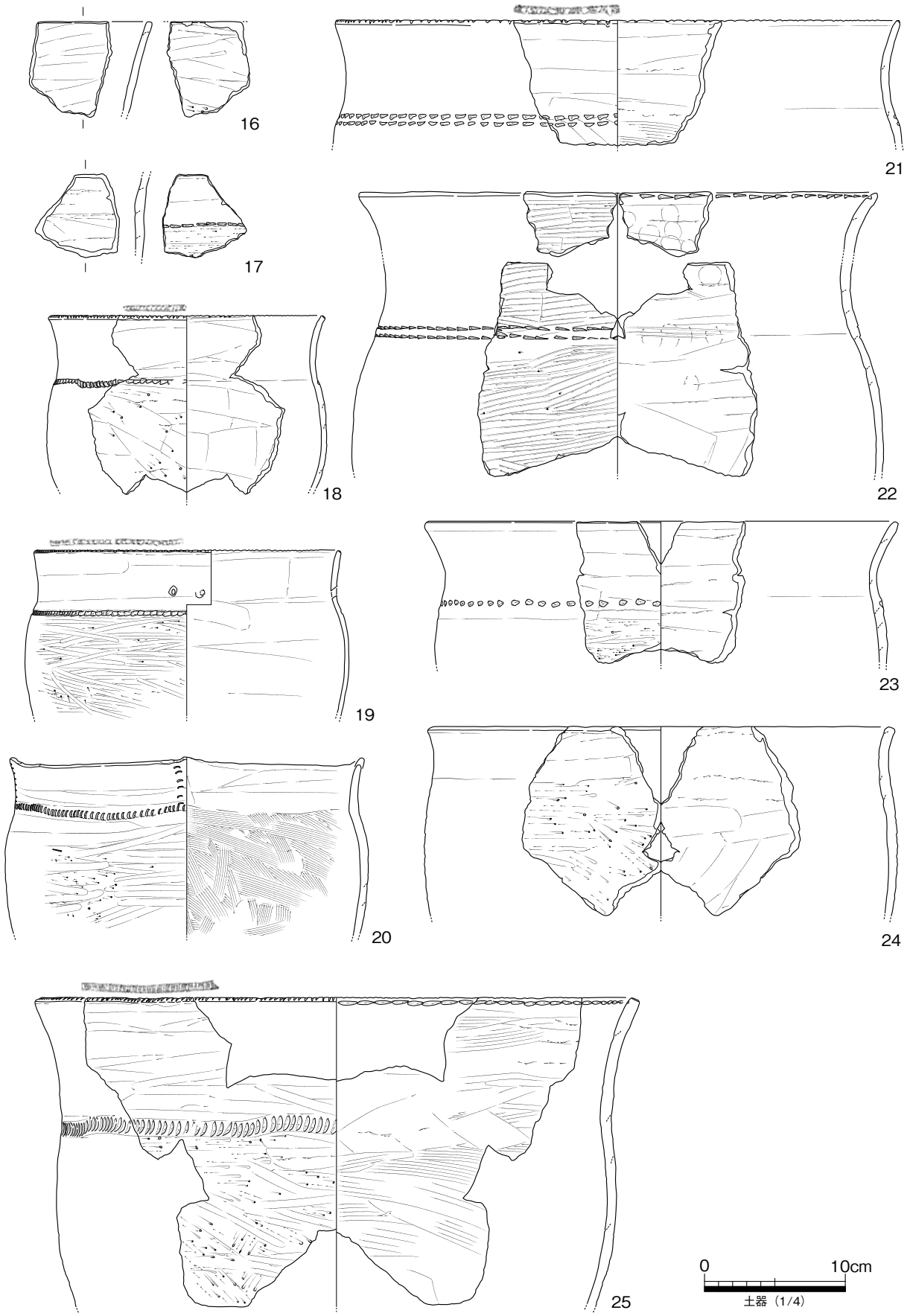
さて、最下層からは、縄文土器浅鉢の小片やサヌカイト剥片、板材などの木製品が少量出土した。**1** は、縄文土器浅鉢Ｅである。後述する下層出土資料が接合した。口頸部が大きく外反して開き、波状口縁となる。波頂部は１箇所のみ残存し、小さな鰭状突起が付す。また口縁端部付近に、内面から径３～４㎜の焼成前穿孔を認めるが、外面までは達していない。内面に赤色顔料の付着を認め、顔料素材について理化学的な分析を実施した。分析により赤色顔料は水銀朱と同定された（第４章第 10 節参照）。赤漆製作のためのパレットとして使用された可能性も考えられたことから、追加して材質分析を行ったが、漆成分は検出されなかった（第４章第 11 節参照）。縄文時代の水銀朱関連遺物は、県内では善通寺市永井遺跡（香川県教育委員会ほか 1990）、高松市東中筋遺跡（高松市教育委員会 2001）などに類例がある。



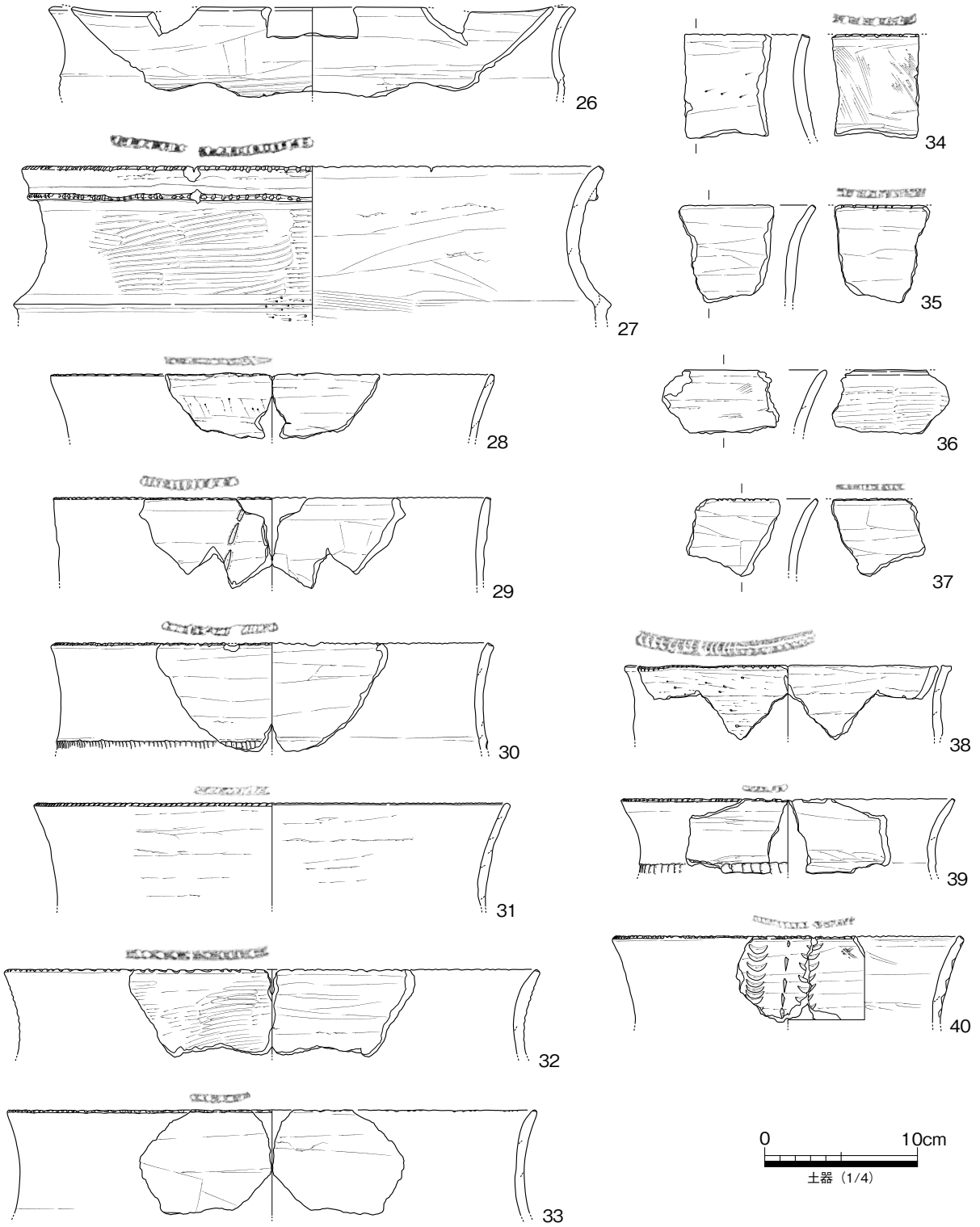
第 14 図　SR01 下層平・断面図



第１５図　SR01 下層出土遺物実測図１



第 16 図　SR01 下層出土遺物実測図２



第 17 図　SR01 下層出土遺物実測図３

2は、左端図の面に一部樹皮が残るクワ属の柾目材を用いた加工木片で、上下両端を千鳥状に削り尖らせる。**3**は、厚さ 1.0cm前後のヒノキの板材で、表面は腐食のためか加工痕などは認めない。図左面に一部炭化部分が残存する。

下層（第 14 ～ 33 図）は、流路西半部に堆積する斜交葉理の発達した中～粗砂層を主体とする、氾濫

堆積物を分層する。層厚 0.6 ｍで、上述した最下層浸食部分では、縄文時代晩期中葉の遺物に伴い、堅果類などの植物遺体が多量に出土した。遺物は、水流による磨滅が認められず、大きく北・中央・南の３群にまとまって出土した。出土位置が判明する遺物は、第 14 図のとおりであり、北群では **17**・**24**・**25**・**30**・**44**・**49**・**52**・**55**・**60**・**68**・**74**・**78**・**86**・**97**・**98** が、中央群では **5** ～ **7**・**10** ～ **12**・**18** ～ **20**・**23**・**27**・**36**・**38**・**40**・**51** ～ **53**・**56**・**57**・**59**・**61** ～ **64**・**66**・**67**・**69**・**70**・**73**・**74**・**77**・**83**・**87**・**88**・**90**・**92** ～ **94**・**96**・**99**・**100**・**108**・**110**・**113**・**116**・**117**・**119**・**126**・**128**・**129**・**132**・**146** が、南群では **1**・**4**・**15**・**21**・**34**・**56**・**58**・**75**・**79**・**81**・**102**・**104**・**125**・**127**・**131**・**133**・**139** がそれぞれ出土している。隣接する群間で接合する資料は少数例に限られることから、埋没時の２次的な移動も限定的とみられ、出土位置は投棄の単位を反映している可能性が高い。本層堆積の初期段階で投棄され、その後急速に埋没したものと考えられる。後述するように、土器表面には良好に炭化物が付着し、水流などによる磨滅の影響を感じさせない。自然河川出土資料ではあるものの、一括性の高い資料群と考えられる。また、堅果類などの植物遺体については、遺跡周辺の植生復元と植物利用の実態について明らかにするため、自然科学的分析を実施した。分析の詳細は第４章に記載した。クリやコナラ属などの堅果類の多産が明らかとなり、それらの残滓が調査地周辺で割られて塚状を呈していた可能性が指摘された。また、同時に出土した陸生の草本植物の種実から、調査地周辺がある程度開けた、乾いた草地が広がっていた可能性が指摘されており、当該期の周辺環境を復元する上で重要である。

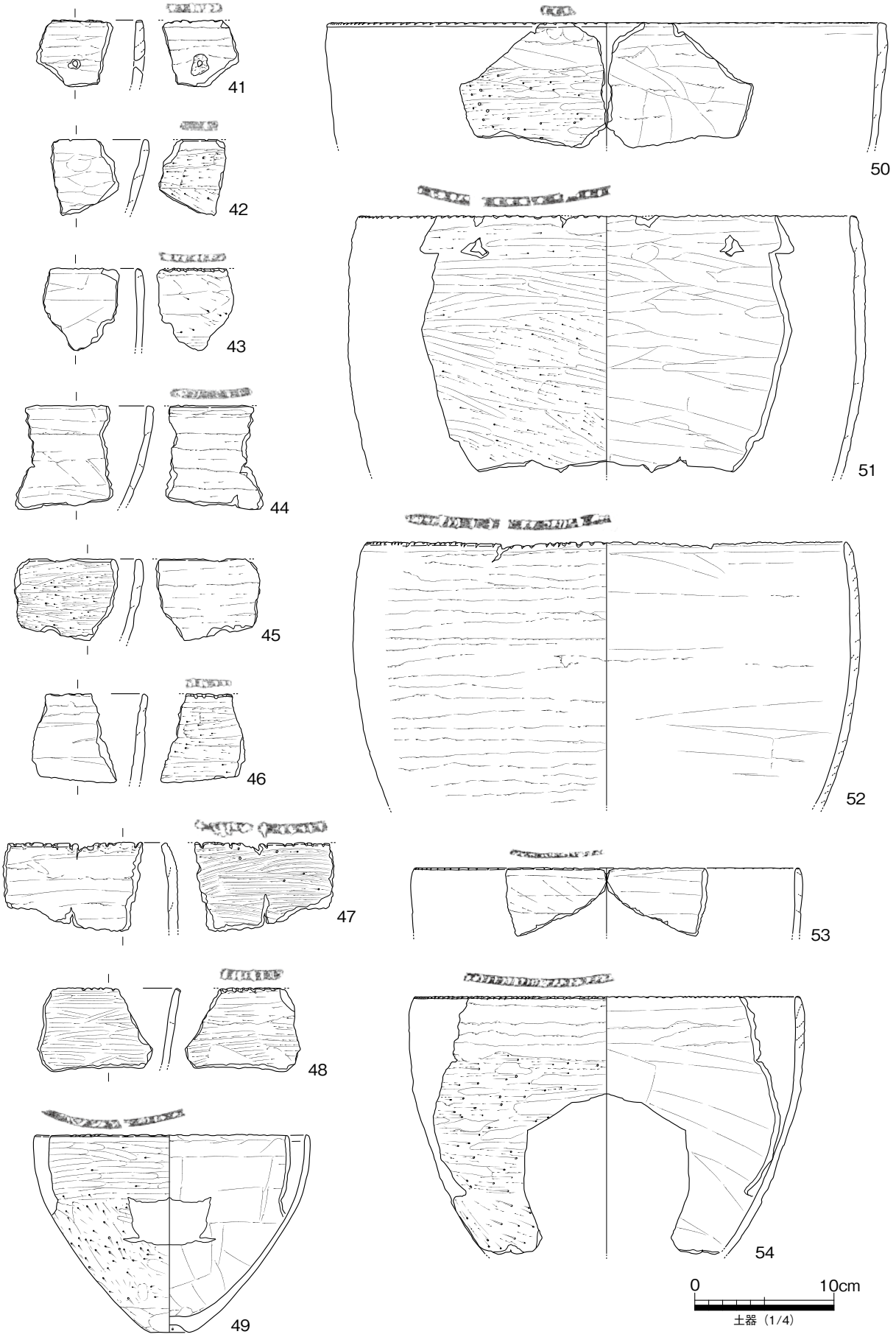
本層からは、縄文時代晩期の資料がコンテナ 14 箱出土し、本遺跡から出土した縄文土器の大半は本層出土資料が占める。本報告で資料化した本遺構出土の縄文土器は、上述した最下層出土資料を含め 96 点である。また、これらとは別に、内面に鱗茎とみられる炭化物が付着した土器片が 27 点（**447** ～ **473**）出土した。鱗茎は出土時には土器に固着していたが、出土後の乾燥などにより非常に脆弱となり、一部は土器から剥落してしまった。したがって他の土器片との接合を行わず、図化を断念して現状の写真を撮影して巻末の図版 51・52 に掲載した。外面の調整などから、いずれも砲弾形深鉢の胴部下半の破片と考えられる。なお、鱗茎については、植物種を特定するため分析を実施した。結果は第４章に記載したように、ツルボの可能性が指摘された。

以下、資料化した土器や石器、木製品について記述する。縄文土器には、深鉢、浅鉢があり、第５章で器種分類を行った。以下の記載はその分類に基づく。

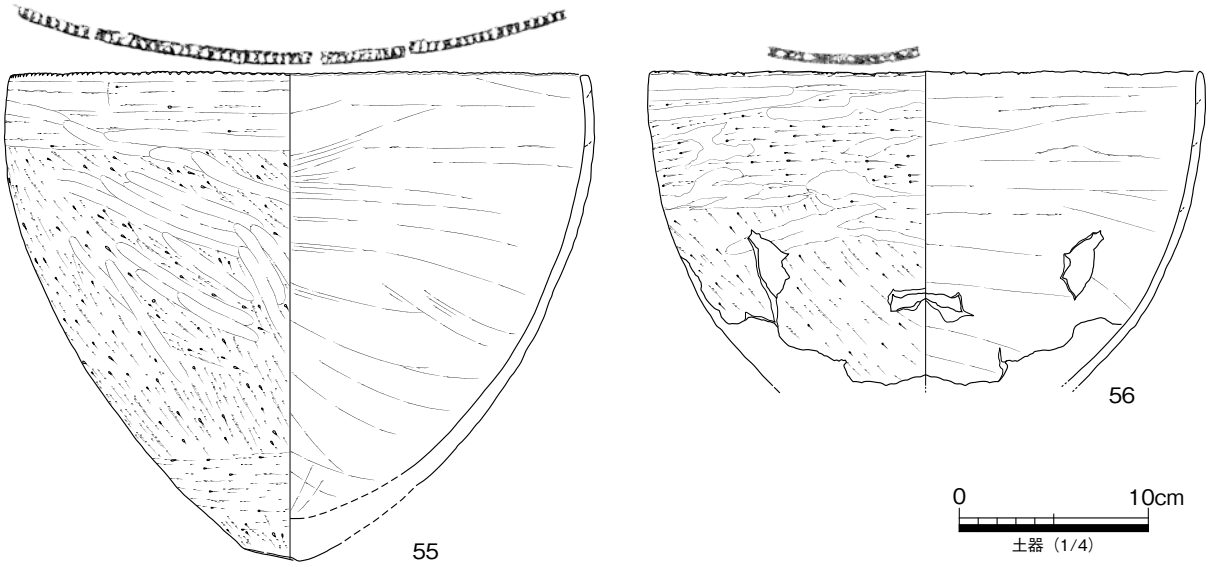
深鉢ＡＩａ類は３点を図示した。いずれも口唇部に刻目を施す。**4** は、屈曲部上位に半裁竹管状工具の背部を器壁に当て、押し引きにより爪形文を横位に施す。胴部外面はケズリ調整後に貝殻条痕を施す。**5** の口頸部外面は、波頂部から縦位に中央に爪形文を７個並べ、両側に列点文をそれぞれ８個配す。下端の屈曲部上位に半裁竹管状工具の押し引きによる刺突文を横位に巡らせる。**6** は、**5** と同一個体の可能性が高いが、接合せず口頸部高がやや異なるため別個体として図示した。

深鉢ＡＩｂ類も３点を図示した。いずれも口唇部に刻目を施す。**8** の口頸部外面には、半裁竹管状工具の先端部を使用した山形刺突文を配し、下端の屈曲部上位に半裁竹管状工具による爪形文を横位に巡らせる。**9** の口頸部外面には、波頂部から縦位に２列の爪形文とその間に２列の列点文をそれぞれ６個配し、下端の屈曲部上位に半裁竹管状工具による爪形文を横位に巡らせる。**7** は、**8** と同一個体の可能性が高いが、接合しないため別個体として図示した。

深鉢ＡＩｃ類は４点を図示した。端部を欠損する２点を除いて口唇部に刻目を施す。**10** は口唇部付近を欠損する。屈曲部上位に半裁竹管状工具の押し引きによる刺突文を巡らし、口頸部にはおそらく波



第 18 図　SR01 下層出土遺物実測図４



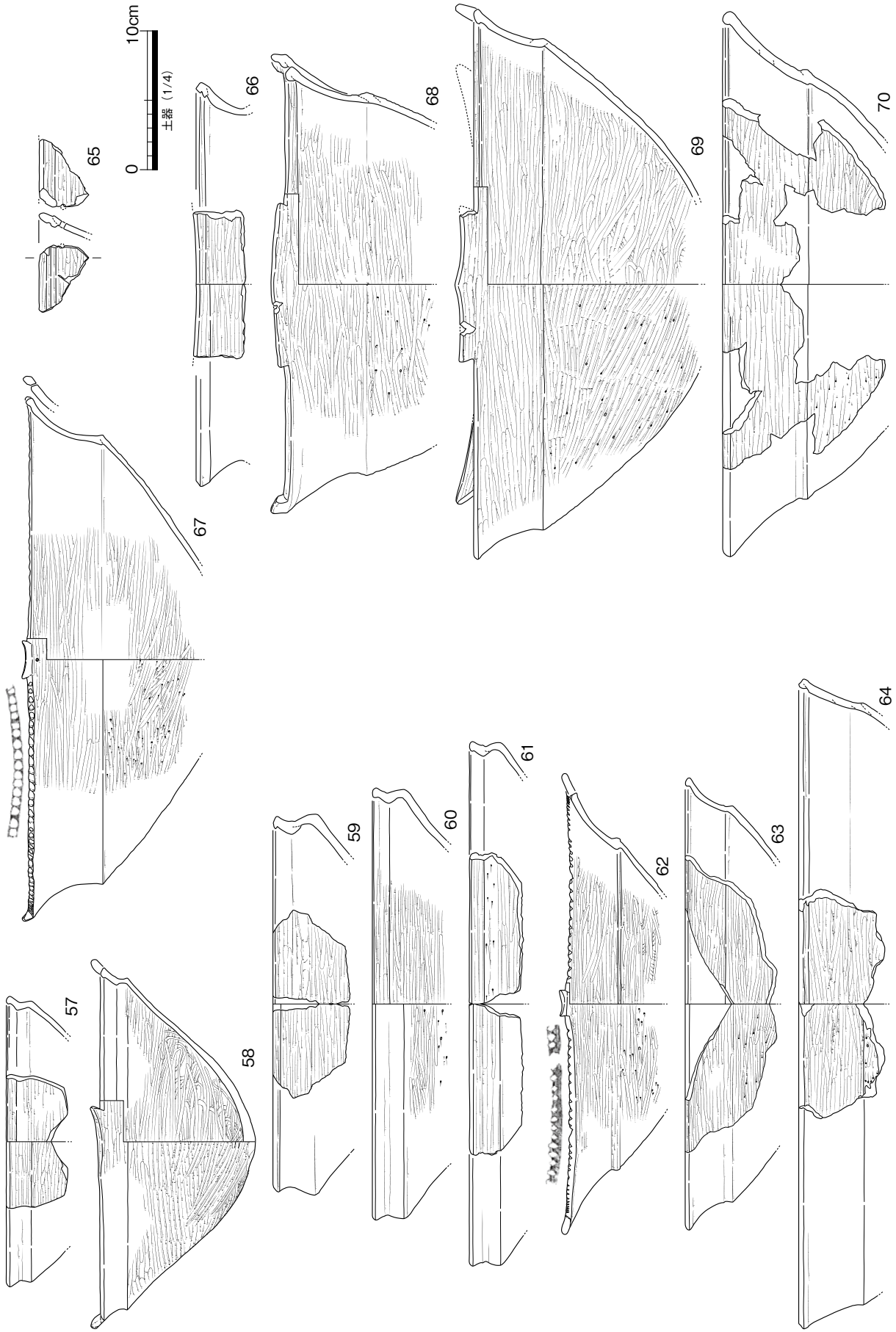
第 19 図　SR01 下層出土遺物実測図５

頂部から縦位に１条の同様な押し引きによる刺突文を施す。**11** は、屈曲部上位に半裁竹管状工具による刺突文を横位に巡らし、口頸部にはおそらく波頂部から縦位に半裁竹管状工具により平行沈線文を３段に施す。**12** は、**11** と同一個体と思われるが、接合しないため別個体として図示した。**13** は口唇部と底部を欠く小片。屈曲部は無文である。

深鉢ＡＩｄ類は 13 点を図示した。**14** は口頸部の小片。屈曲部上位に半裁竹管状工具の押し引きによる爪形文を施し、その上から山形刺突文を描く。**15** も小片だが、口唇部に刻目を施す以外に、加飾は認めない。**16**・**24**・**26** は、口唇部への刻目なども省略され最も加飾に乏しい一群である。**26** の口縁部の歪みは大きく、波状となる可能性もあるが、残存部からは断定できなかった。**17** は、屈曲部上位に連続する刺突文を横位に施す。**18** は、屈曲部の上位に半裁竹管状工具の押し引きによる爪形文を横位に施す。**19** は、屈曲部の上位に半裁竹管状工具の内側を器壁に当て、押し引きにより横位の爪形文を施す。また、口縁端から約３㎝下位に、紐通しの穴とみられる径２～３㎜程の小円孔２孔を焼成前に穿つ。**20** は、屈曲部の上位に半裁竹管状工具の背部が器壁に当たるようにして押し引いた爪形文を横位に施し、波頂部には縦位に同じ施文を６個施す。**21** は、屈曲部の上位に半裁竹管状工具の両先端部を利用した刺突文を横位に施す。**22** の口縁部と胴部は接合しないが、胎土や調整、色調などが酷似することから、同一個体と判断し図示した。屈曲部上位に **21** と同様の爪形文を横位に施し、口唇部内面には同一原体の一方の先端部を押し引いた刺突文を施す。**23** は、屈曲部の上位に棒状工具による刺突文を横位に施す。**25** は、屈曲部上位に **20** と同様の爪形文を横位に施し、内面口縁部には **22** と同様の刺突文を巡らす。胴部はケズリ調整後一部にナデ調整を加える。

27 はいわゆる突帯文土器（ＡⅡ類）で、晩期後葉に位置付けられる。本層出土の突帯文土器は、本資料１点のみであり、混入なのか本層堆積の下限を示す資料と位置付けられるのか判断が難しい。口唇部下に突帯を貼付し、口唇部と突帯上にはやや崩れたＤ字形の刻目を施す。頸部外面と胴部内面は二枚貝条痕の後一部ナデ調整を施す。

28 ～ **40** は、屈曲深鉢Ａ類の口頸部の小片で、屈曲部を欠損しているため、細分が不詳のものである。**28** の口唇部には、浅い刻目をランダムに施す。**29** の外面には **14** と同様の山形刺突文が配され、同一



第 20 図　SR01 下層出土遺物実測図６

個体の可能性がある。**30** は、屈曲部の上位に半裁竹管状工具の内側を器壁に当て、押し引きにより横位の爪形文を施す。**34** は、屈曲部上位が無文となる可能性が高く、**15** と同様に深鉢 A4 である可能性がある。**39** は、屈曲部の上位に半裁竹管状工具の押し引きによる爪形文を横位に施す。**40** の口頸部外面には、中央に列点文を縦位に５個以上連ね、その両側に爪形文９個以上により加飾する。

深鉢Ｂ類は、小片のため本分類としてよいか、やや判断の困難なものも含むが、一応 16 点を図示した。口唇部刻目の有無により２分されるが、刻目を欠く **42**・**44**・**45** は３点と少数である。外面調整は、ナデもしくは板ナデ調整（**41**・**44**・**45**・**52**・**53**）とケズリ調整（**42**・**43**・**46**・**49**・**50**・**54** ～ **56**）、二枚貝条痕（**47**・**48**・**51**）がある。**41** は口唇部下約３㎝の位置に、外面から小円孔を焼成後に穿孔する。**55** はほぼ全形が判明する資料である。口縁部に刻み目を施し、外面はケズリ調整後にミガキないしナデ調整を、口縁部を中心に施す。底部は浅い凹底を呈する。

57 ～ **82** は浅鉢で、A2、B1・B2、Ｅ、Ｇ、H1 ～ H3 類の８型式に細分した。

浅鉢 A2 は５点を図示した。**57** は口頸部を中心とした小片で、胴部外面はケズリ後上端部にミガキ調整を施す。**58** は、ほぼ完形に復元される。口縁部は一部のみの残存だが、鰭状突起を確認できる。底部は尖底状の丸底で、胴部から底部にかけて二枚貝条痕の後にナデを施す。**59** ～ **61** は、いずれも胴部中位以上の小片で、内外面ミガキ調整が多用される。

浅鉢 B1 は **62** のみ図示した。内外面ミガキ調整を施した半精製品で、口縁部に小さなリボン状の突起を有する。

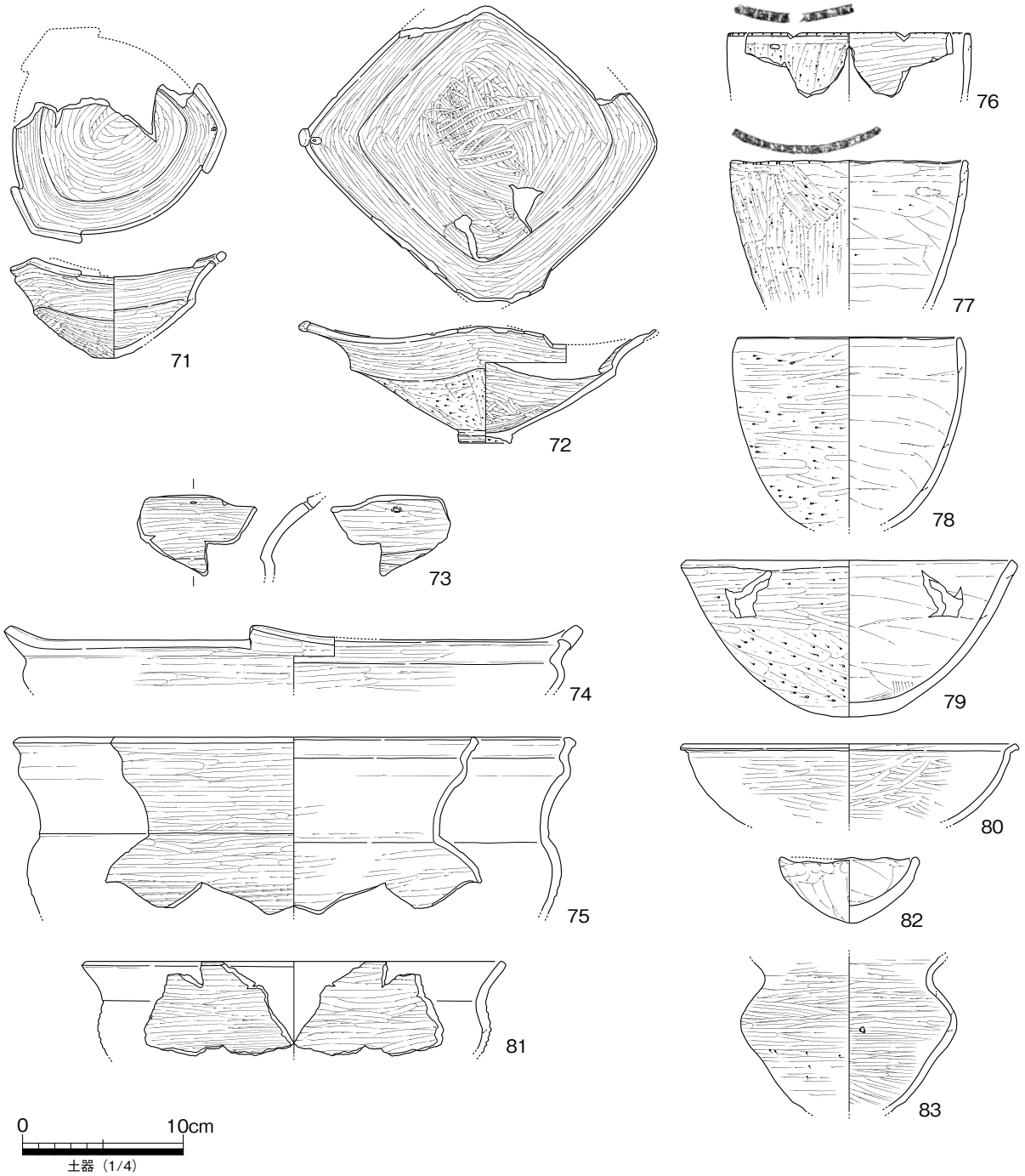
浅鉢 B2 は **63** ～ **70** の８点を図示した。**63**・**64** の胴部外面は、いずれもケズリ調整後ミガキ調整を加える。**65** は口頸部小片として図示した。口縁部に山形とみられる突起が付す。**66** は口縁部に鰭状の突起が付す。**67** は、口縁部にリボン状の突起を有し、その直下に径２㎜程の小円孔を焼成前に穿孔する。また口唇部にはＤ字形の刻目を施す。**68** は、口縁部の突起数は不詳だが、山形突起１を認める。内外面ミガキ調整が施された半精製品である。**69** は、口縁部は３突起となり、山形と鰭状各１箇所が残存する。図では残る１か所を鰭状突起として図示した。胴部外面は二枚貝条痕を施す。**70** は小片のため、突起は不明である。

浅鉢Ｅは３点を図示した。**71** は口縁部に山形の３突起が付す。うち１箇所の突起下に、小円孔を焼成前に穿つ。胴部外面は二枚貝条痕を施す。**72** は、口縁部内面に沈線を伴う。突起は小楕円形、鰭状のものが各１か所、無突起とみられる箇所が１箇所、不明１箇所の４突起で、楕円形突起の下位、沈線部分に径２㎜程度の小円孔の焼成後穿孔を認める。**73** は口頸部の小片。内外面に丁寧なミガキ調整が施され、上端部に径約５㎜の小円孔が焼成前に穿孔される。

浅鉢Ｇは２点を図示した。**74** は口頸部の小片で、浅鉢 A2 の可能性も残る。口縁部に鰭状突起１を認める。**75** は口頸部を中心とした破片で、外面は口頸部から胴部上位にかけて丁寧なミガキ調整が施され、胴部下位は二枚貝条痕を認める。

浅鉢Ｈは５点を図示した。精製品の H1 類は **80** の１点のみで、その他は粗製もしくは半精製の H2 類である。口唇部に刻目を施す **76**・**77** を除いて、いずれも加飾を認めない。**80** は小さく折り返して開く口縁部を有する。

81 は、口縁部が大きく外傾して開く浅鉢として図示したが、小片のため別の器形となる可能性がある。**83** は、やや張りのある胴部から頸部が強く括れて、小さく外反する口縁部を有する浅鉢である。永井遺跡 SR8501 Ⅺ層（香川県教育委員会ほか 1990）に類似した資料（844）を認める。内外面ミガキ調整

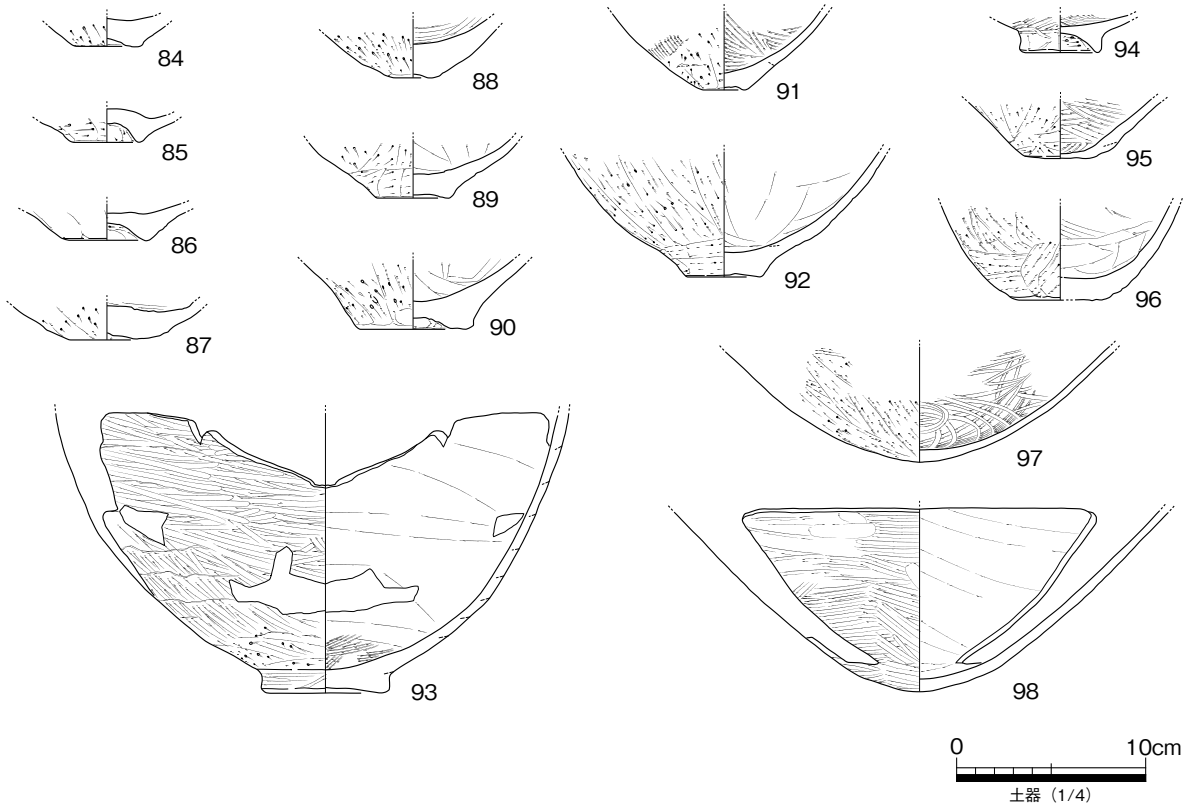


第 21 図　SR01 下層出土遺物実測図７

を多用した精製品である。

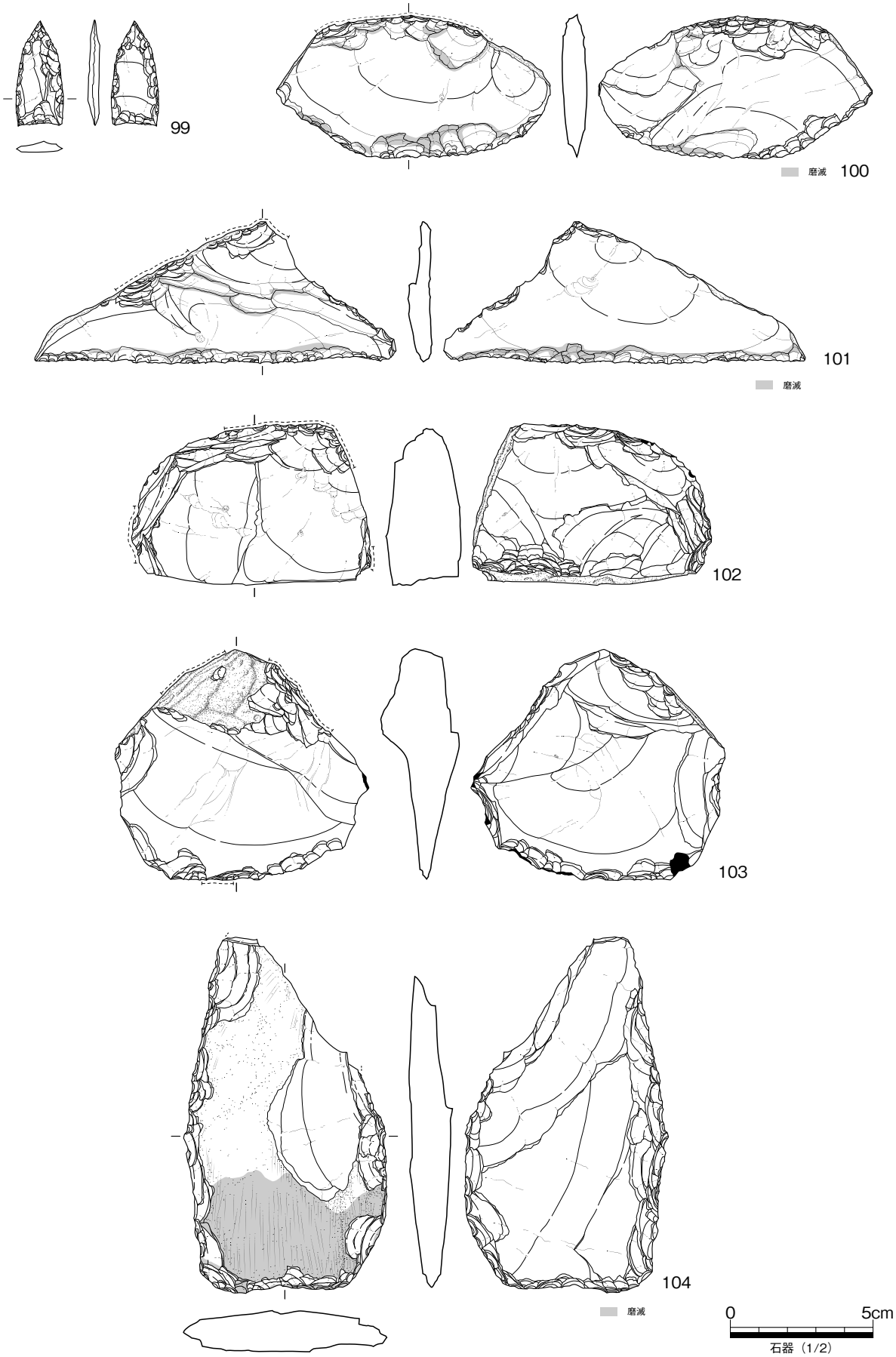
84 ～ 98 は底部片である。底部には、凹底Ⅰ類（84 ～ 94）と平底Ⅱ類（95・96）、尖底（97・98）がある。凹底には、Ⅰａ類（84・87 ～ 89・91）とⅠｂ類（85・86）、Ⅰｃ類（92・93）、Ⅰｄ類（94）があり、底部に調整により、ケズリ調整のもの（85・88・89・91・92・94）と、ケズリ調整の後にナデ調整を施したもの、もしくは押圧により凹底としたもの（84･86･87･93）に分けられる。なお 90 は、焼成後に敲打により径約 2.5cmの円形の浅い凹底とした可能性があり、上記分類には属さない。平底には、Ⅱａ類（95）とⅡｂ類（96）がある。尖底形態のものは、いずれも丸底に近い。

99 ～ 133 は石器・石製品である。99 は平基式石鏃。100 はスクレイパー。背部には敲打による潰れ

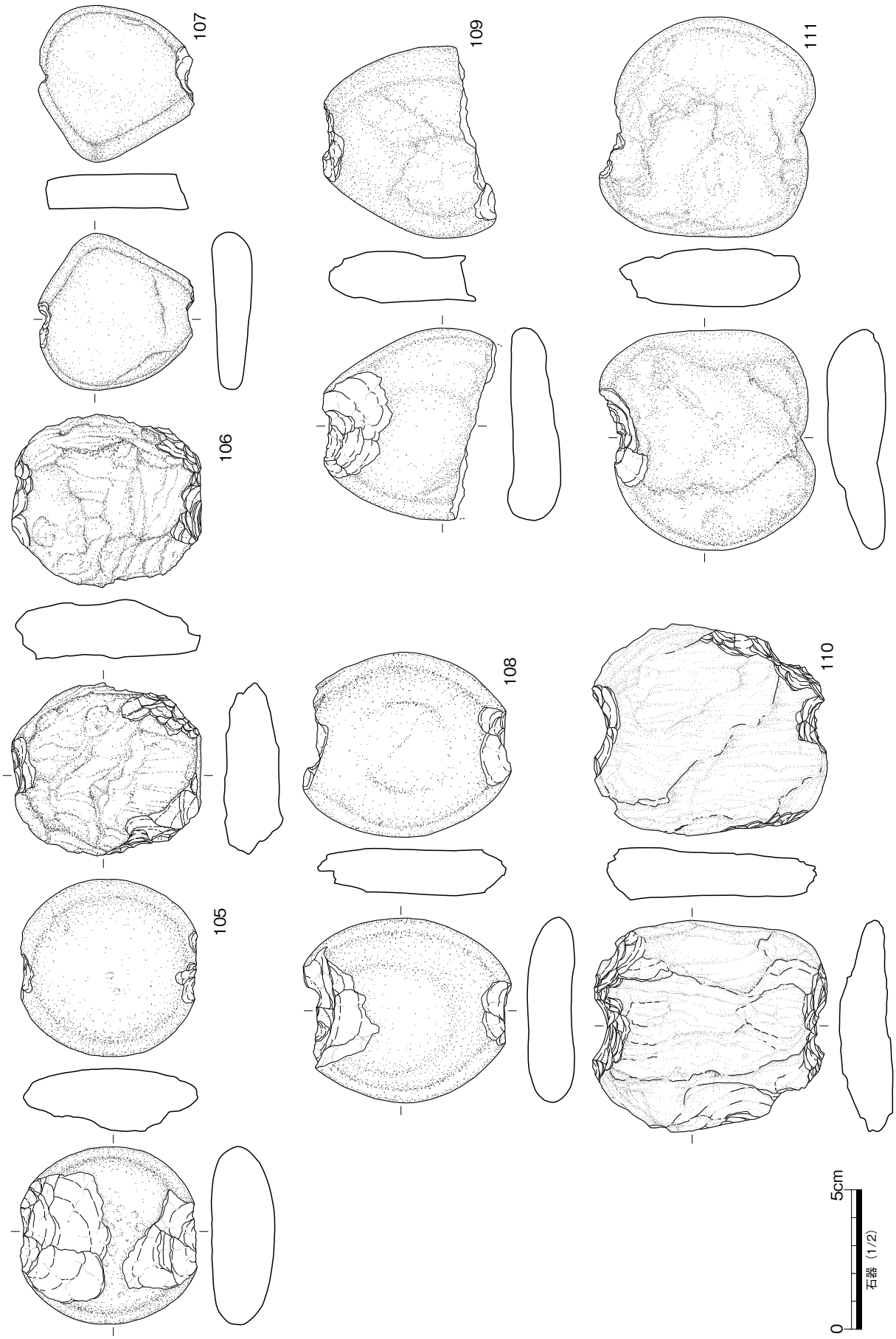


第 22 図　SR01 下層出土遺物実測図８

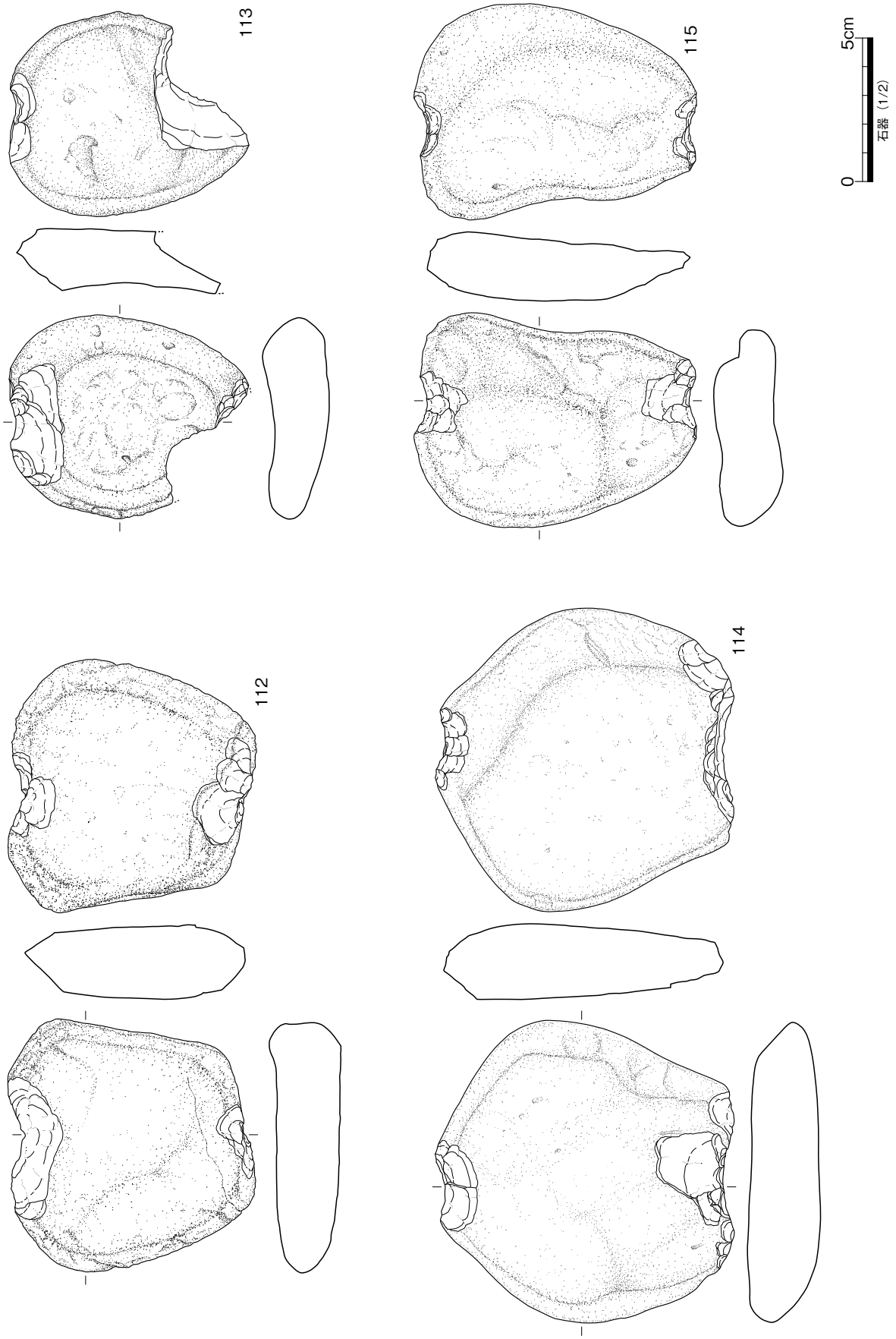
を施す。両側縁に自然面を残し、両面に弱く磨滅痕を認める。**101** は直線的な刃部を有するスクレイパー。側面の一部に自然面を残し、表裏面は弱く磨滅痕を認める。**102** は、左図右側面と下面に自然面を残す楔状石核である。左図上縁と左右側縁の一部に、敲打による潰れを認める。**103** は、上下縁に敲打による潰れがみられることから、石核とした。図左面に自然面を残す。**104** は、安山岩の自然礫（亜円礫）を素材とする打製石斧である。図左面に自然面を残す。また、図左面を中心に両面に磨滅痕や線状痕を認める。**105** ～ **123** は、いずれも扁平な亜円礫を使用した打欠石錘である。石材は、**105**・**107** ～ **109**・**111** ～ **122** が細粒砂岩、**106**・**110** が泥質片岩、**123** が安山岩と３種類が認められる。砂岩と安山岩製のものは、土器川か金倉川などの遺跡周辺の河川流域で採取された可能性が高く、片岩製のものは、徳島県か愛媛県東部の三波川帯を流下する河川から採取され、遺跡へ搬入されたと考えられる。長軸６～ 10㎝、厚さ２㎝前後、重さ 110 ～ 220 ｇの円磨度の高い自然礫を標準サイズとし、長軸方向の上下縁中央部を打ち欠いて成形する。**107** は、重さ約 58 ｇの小型品である。**116** は、直線状を呈する図下縁への加工が乏しく、未製品の可能性も考えられる。**118** は、下端部を折損として図示したが、重さは 200 ｇを越えており、打ち欠いた調整痕の可能性も考えられる。**125** は、泥質片岩の自然礫（亜円礫）の一部に剥離が施されたもので、図左面に広く自然面を残し、右面は大きく剥離する。用途不明だが、打欠石錘の破損品の可能性が考えられる。**124**・**127** も、泥質片岩の板状の剥片で、周縁に加工痕とみられる剥離痕を認める。石材などから石錘の可能性を考え図示したが、別の器種の可能性も残る。**126** は、泥質片岩の薄い板状の剥片で、用途は不明。図右面にやや強い磨滅痕を認めるが、人為的なものかは断定できない。**128** は結晶片岩製の磨製石斧。刃部を大きく欠損する。また、図左面を中心に、製作時の敲打痕を多く残す。**129**・**132** は敲石。**129** は安山岩、**132** は黒雲母花崗岩のいずれも円



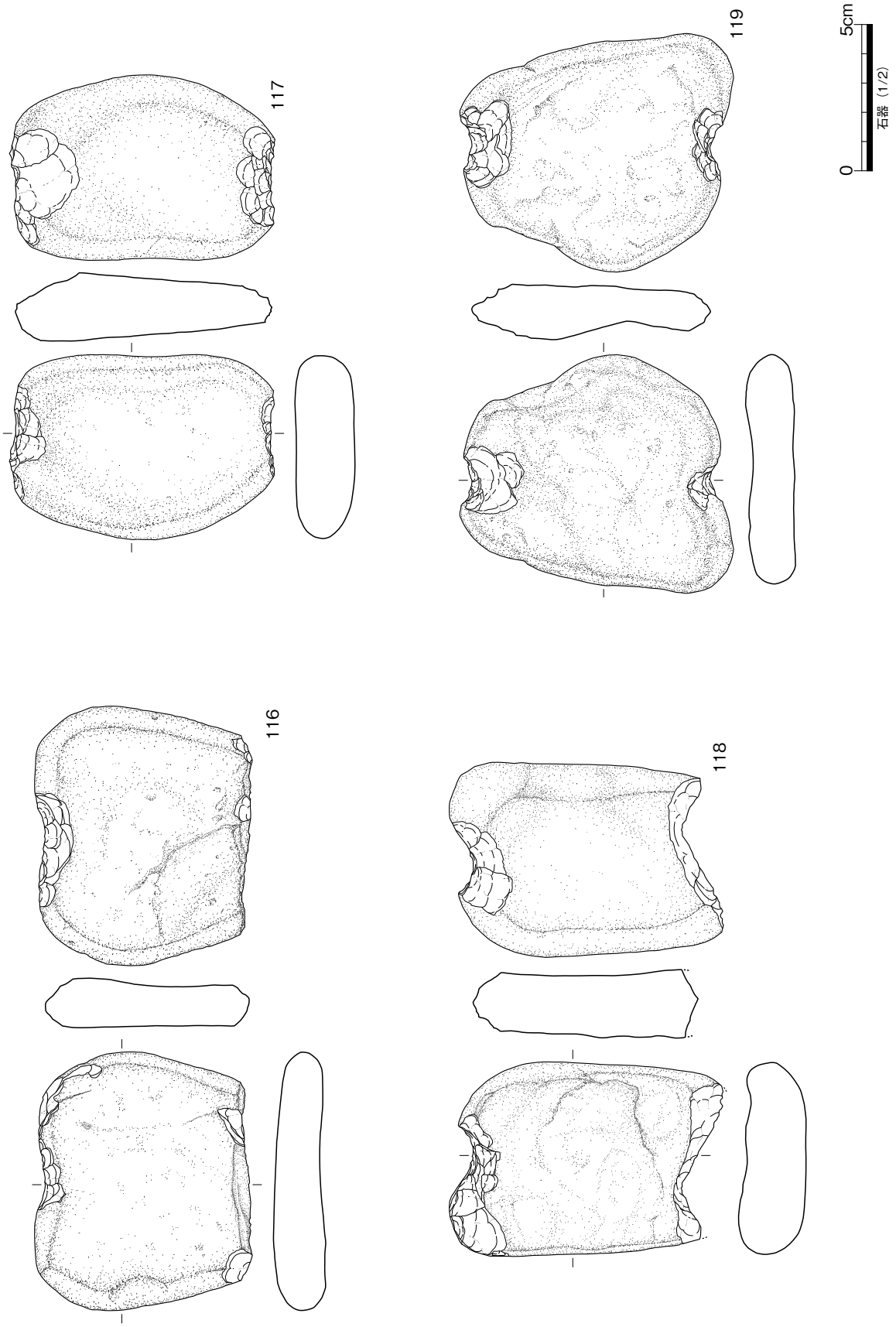
第 23 図　SR01 下層出土遺物実測図９



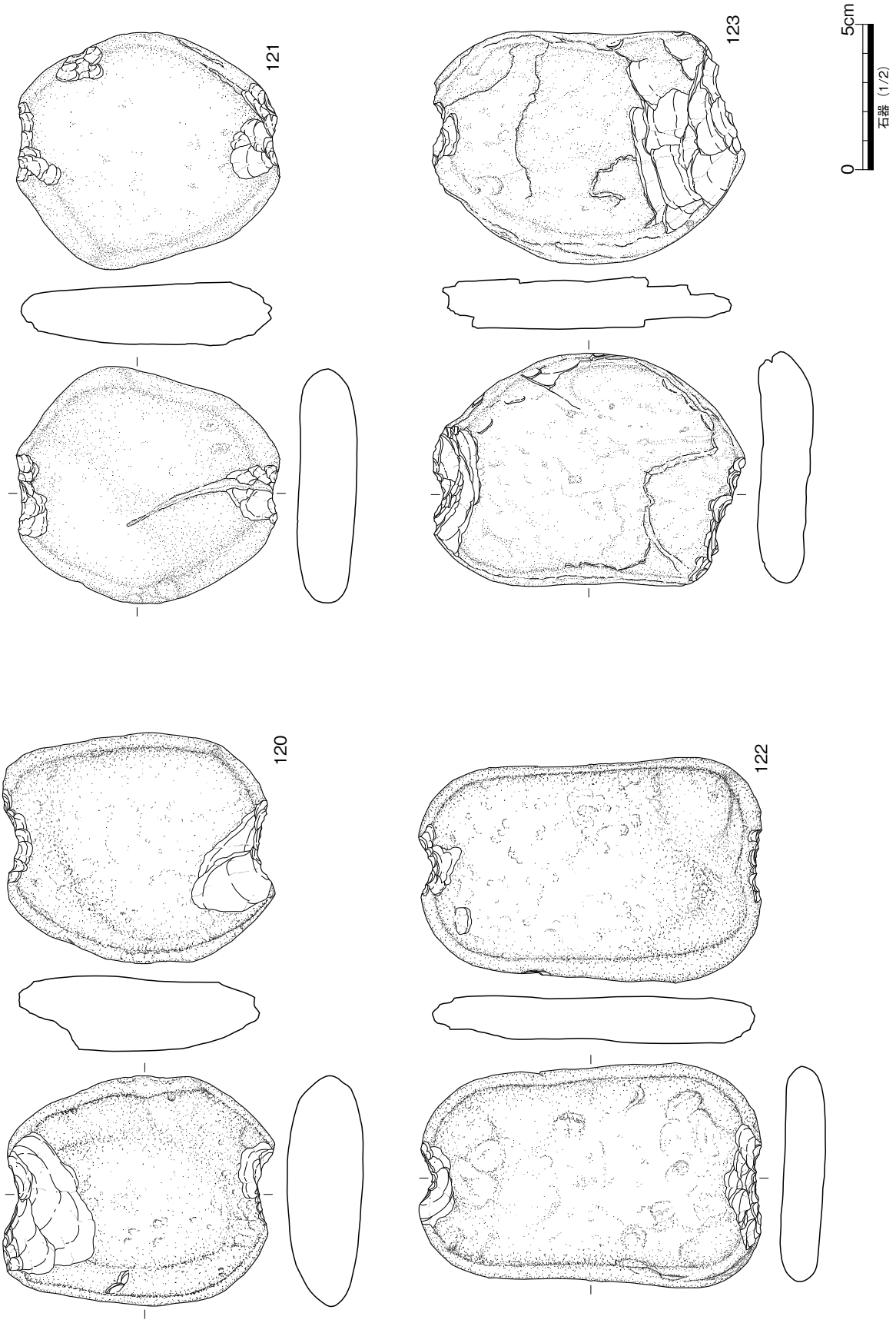
第 24 図　SR01 下層出土遺物実測図 10



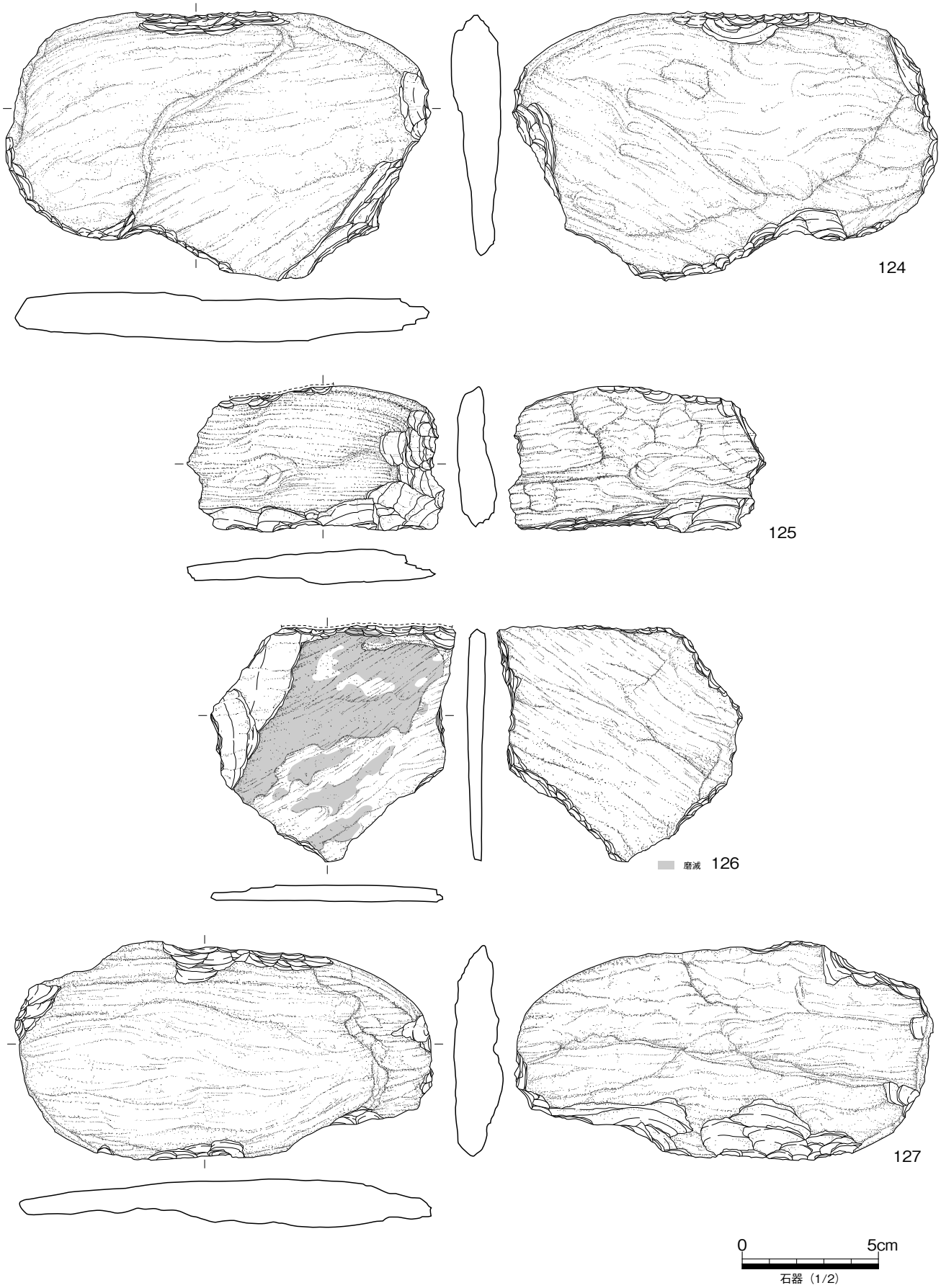
第 25 図　SR01 下層出土遺物実測図 11



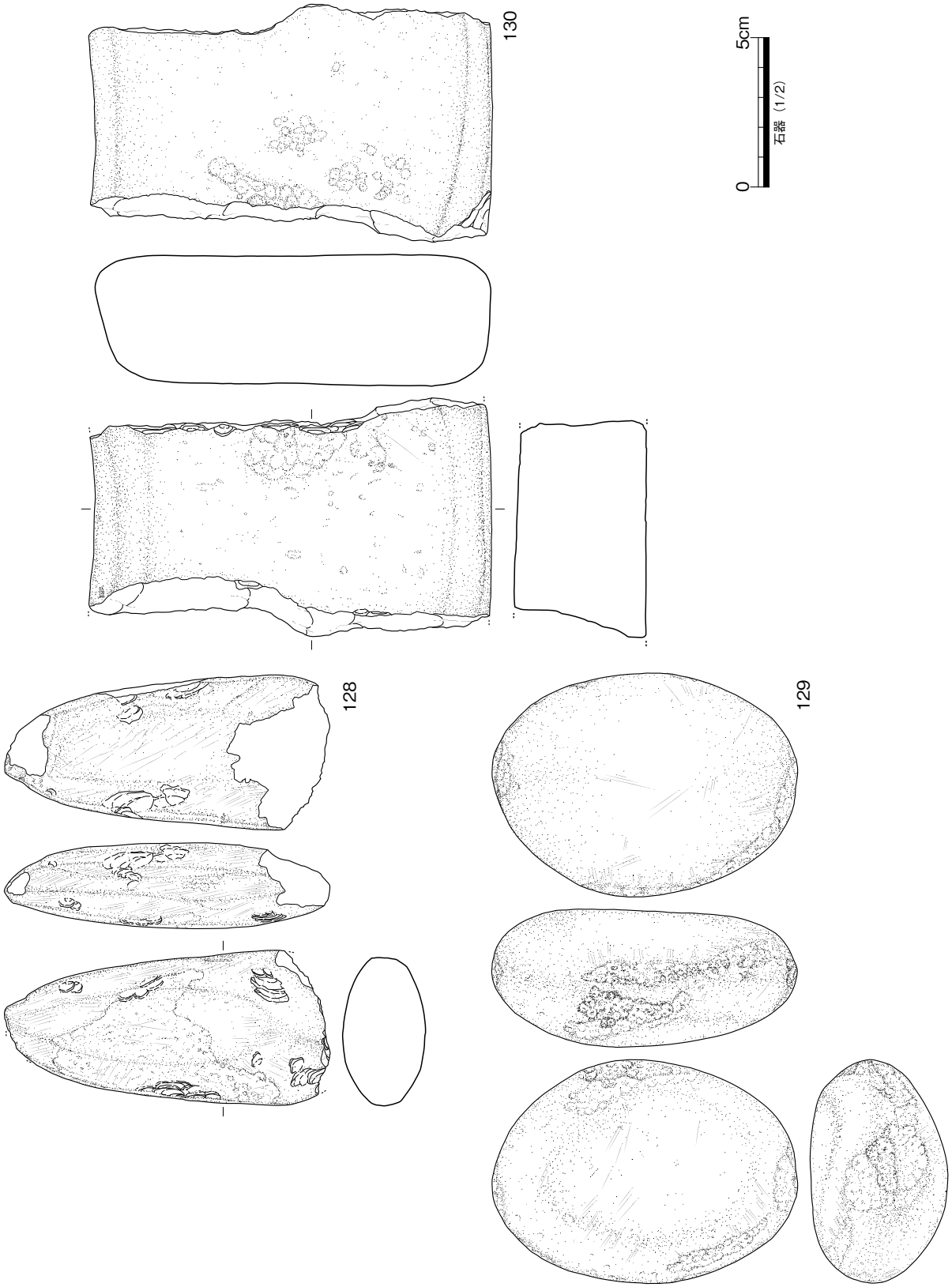
第 26 図　SR01 下層出土遺物実測図 12



第 27 図　SR01 下層出土遺物実測図 13

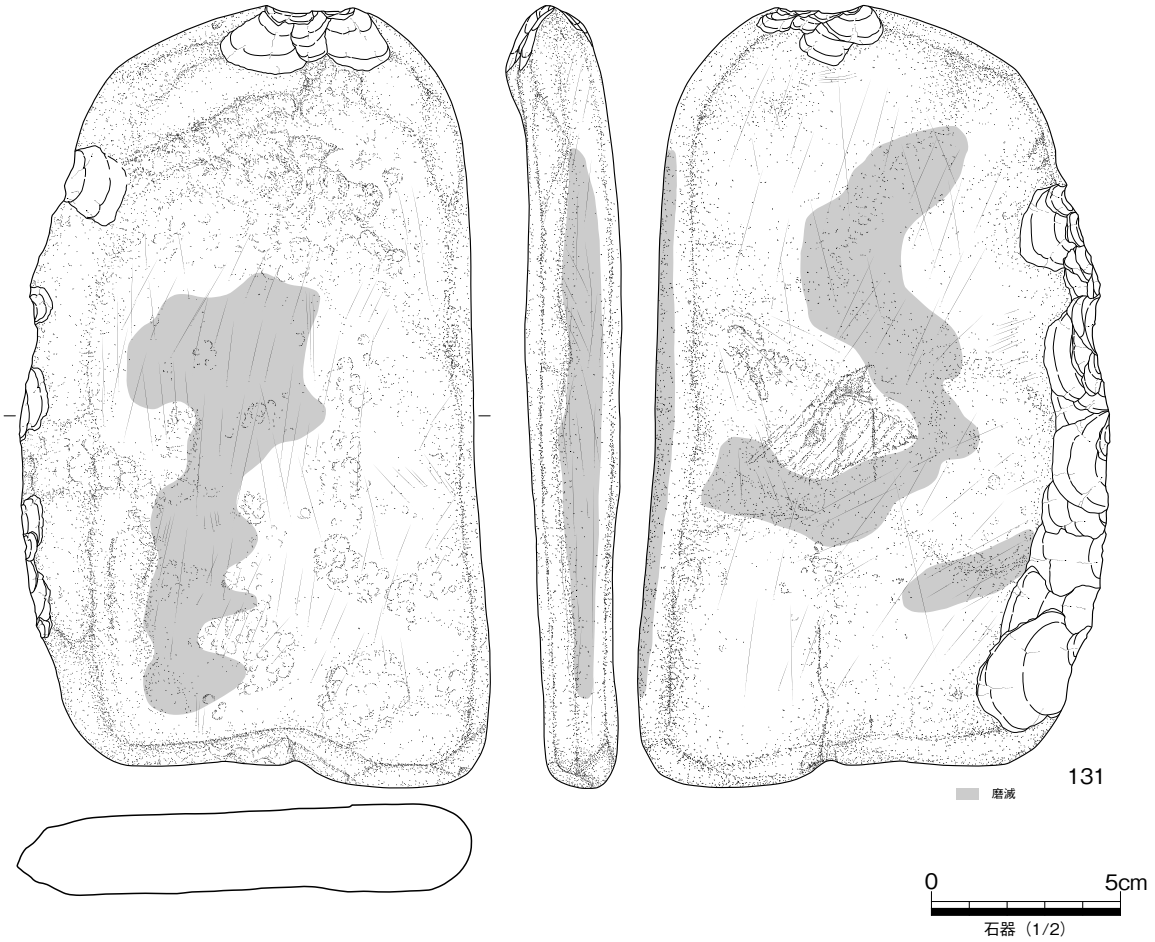


第 28 図　SR01 下層出土遺物実測図 14



第29図　SR01 下層出土遺物実測図15

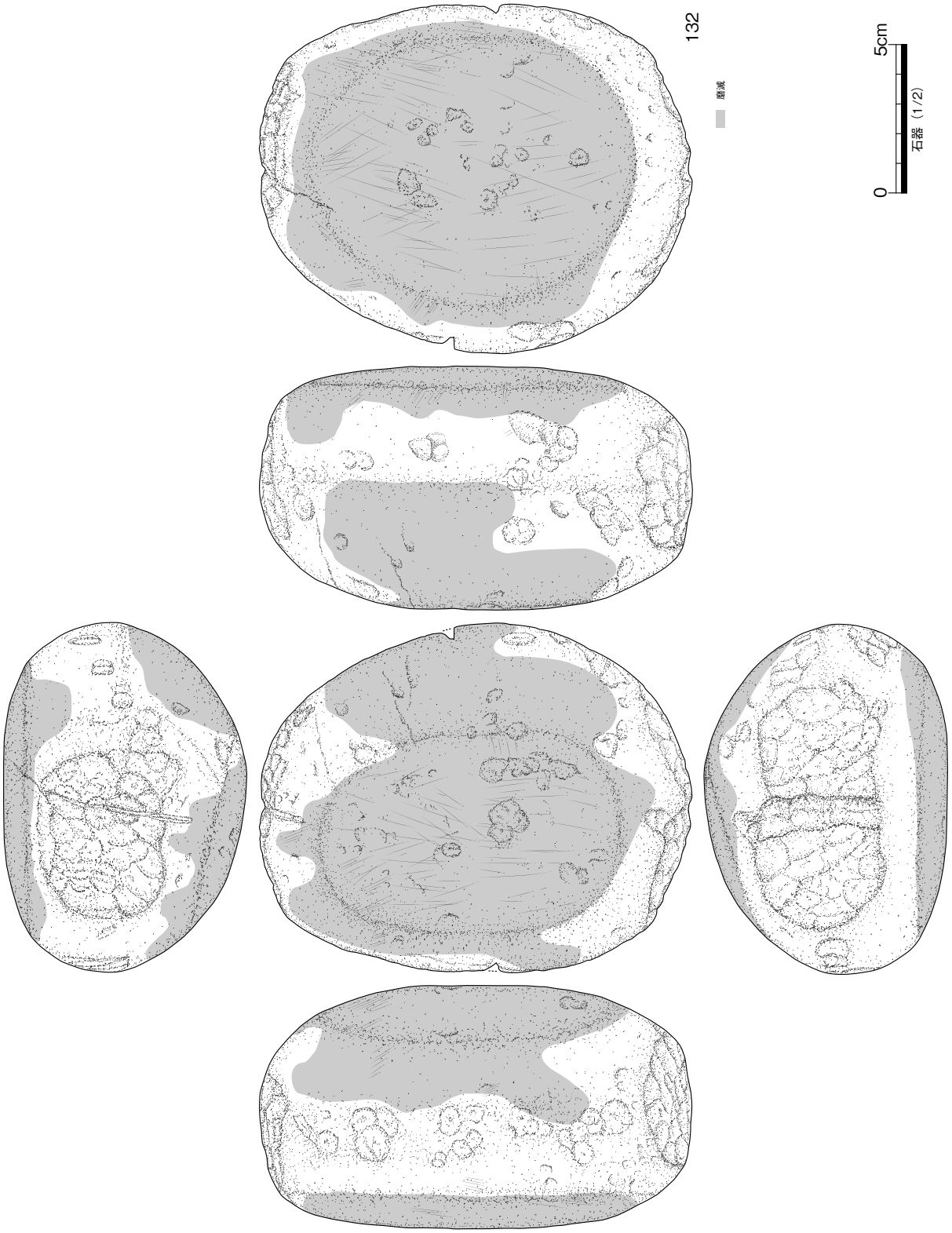
礫を使用する。上下端面を中心に、両側面に敲打痕を認める。また、表裏広端面には、擦痕と強い磨滅痕を認め、磨石としても使用されている。**130** は、砂岩製の台石である。厚さ約４㎝の板状の亜円礫の表裏面に、僅かだが敲打痕と擦痕を認める。**131** は細粒砂岩製の台石。表裏面と左図右面の３面に、擦



第 30 図　SR01 下層出土遺物実測図 16

痕と磨滅痕を認める。また、左図右縁と上縁を一部打ち欠いており、礫石錘として転用しようとした可能性も考えられる。**133** は、略 10cm方角の方柱状の安山岩の亜角礫を使用した台石あるいは砥石である。図中央の左側縁を中心に交互剥離による加工痕が認められ、当初は石核か石棒などの別の器種としての利用を目的とした加工がなされていたと考えられる。しかし、図にあるように側面３面を中心に強い磨滅痕や線状痕を認め、一部は剥離面にも及んでいることから、最終的には台石などとして使用されたと考える。なお、当該石材を素材とした石棒は、本地域では出土していない（蔵本 2017）。

134 ～ **139** は木器・木製品である。**134** は樺皮とみられる樹皮で、左図右側で５周、左側で３周樹芯部を内側に巻かれており、破損部は認めないことから、材から樹皮を剥ぎ取った、そのほぼ原形を維持しているものと考えられる。これを展開した場合の延長は約 32.1cmとなり、概ね直径 10cm程度以上の大きさの材から採取されたと考えられる。幅は 5.1cmである。**135** ～ **138** はクワ属の薄い板状の加工木片である。**136** の下端、**137** と **138** の上下端部には切断痕を、**135** の右図中央に刃痕をそれぞれ認める。また、いずれも表面は磨滅のためか加工痕に乏しい。こうした一部に加工痕の認められる端材や炭化材、木端は、第４章第 10 節の本層から出土した自然木などの樹種同定表（付表１）に示したとおり、多量に出土しており、本河川周辺でクリ材などを利用した木材加工がなされていた可能性は高いと考えられる。出土した石器における伐採斧や加工斧の比率は低いが、木製資料には石器組成からは伺えない事実が示されている。**139** は、クスノキの瘤材もしくは樹洞部を利用して成形した刳り抜きの容器である。口縁部を中心とした上半部は大きく折損しているようだが、長側面図の左側端部がやや尖る可能性



第 31 図　SR01 下層出土遺物実測図 17

が高く、全体として舟形を呈するとみられる。内面は、腐食などの影響もみられるが概ね平滑に調整され、底部外面にはやや粗い加工痕を認める。未製品の可能性も考えられるが、断定するまでには至らない。また、外面上半部を中心に黒色炭化部分を認める。２次的な被熱によることは確実だが、その要因は明らかにはできない。類似した容器は、縄文時代後期中頃の永井遺跡暗茶灰色粘質土（下層Ⅰ）（香